



恋縛の
ユーフォリア

作 クマノミの実





GAME START：異世界転移とスキルガチャ

——懐かしい夢を見た。

「やーい。おんなおとこー！」

「おんなおとこー」

「や、やめてよお……」

子供の頃のボクが数人の子供に揶揄われている。

小さなボクは何も言い返すことも出来ずに、涙目で俯いている事しか出来なかった。

「お前、女なのに男の振りをしてるんだろー」

「そうだそうだー！」

「違うよお……。ボクは男の子だよお……」

「うっそだあー！」

「嘔吐きー」

「ううっ……」

子供の頃のボクは、気弱で力も弱く、喋るのもあんまり得意じゃ無かった。

それに名前も有^{ゆう}って中性的な物だったから、良く女みたい、って揶揄われてたんだ。

……………今でもそんなに変われている訳じゃないのが恥ずかしい所だけど。

「こら、アンタたち！また有の事をいじめて！」

「――げっ。おとおんなだっ!？」

「逃げろー！」

「こらー、逃げるなー！ー！」

幼い少女の、元気な声がその場に響く。

やって来たのは、ボクの幼馴染の女の子だった。

「大丈夫だった、有？」

「……………うん。ありがとう■●ちゃん」

「また、アイツらに何かされたら言ってね！引っ叩いてやるんだか

ら！」

「う、うん……」

少女がブンブンと可愛らしく腕を振り回す。

彼女は、こんな情けないボクの事を、いつも元気に助けてくれていたのだ。

「大丈夫、有はわたしが守ってあげるからね！」

「あり、がとう……」

元気に胸を張る幼馴染の姿を見ながら意識が浮上する。

最後に、夢の中の自分と、今の自分の想いが一致した。

——こんな情けないボクだけど、いつか逆に彼女を守れるような、男らしい男になりたいな、と。

都立・手井江洲高校^{ていえず}の年生。

本原^{もとはら} 有^{ゆう}はその日、とても幸運らしかった。

適当に朝のニュースを見てみれば、星座占いで一位。同じく、適当な雑誌を開いて出て来た占いで一位。

朝ごはんの時に出来たお茶の中には茶柱が立ち、通学途中には白猫を見かけ、自販機で飲み物を買えば、当たりが出来てもう一本手に入った。

そしてそんな彼だが現在——何もない真^まっ白^{しろ}な空間に居た。

（どこが、今日一日良い事が続くでしょう、なんだ……）

有は現在、自分の身に起きたあり得ない不運^{ふうん}を内心でとても大きく嘆^{なげ}いていた。

何が起こったのか、それは彼自身にも良く分かっていない。

学校について自分のクラスに入り、席に着いてE³が始まるのを待っていた時に、突然大地震が起こったのだ。

「地震だ!？」とか「きゃああああ!!!」とか「机の下に隠れろ

!!」だとか、有のクラスメイト達は、それはそれは大慌てで、有も同様に狼狽してしまつて何一つ行動する事が出来なかった。

そうこうしている内に、何故か教室の中を、意味不明で強力な白い光が覆っていき、気が付いたらこんな場所に居た、と言う次第である。

「一から振り返ってみても、全く意味が分からなかった。

そんな風に混乱の極致にあつた有だが、そんな彼にさらなる驚きの展開が待ち受けていた。

「ようこそ、新たな玩具たち！私はお前たちを歓迎しよう！」

「—————ひっ」

それは、敢えて形容するのならば、巨大な光の塊だった。

先ほどまで何も無かつた筈の空間に、正体不明の巨大な存在感を持つナニカが鎮座しているのだ。

「何故、私がお前たちを呼び寄せたのか。それを説明してやろう！」
そうして、曰く有を此処に呼び寄せたらしい巨大な光は、その目的を説明したのである。

「――と言う訳だ」

「そん、な……」

巨大な光が有に語った言葉を纏めると、

①自分はお前たちが言うところの神様の存在。

②お前たちには自分の暇つぶしの為に、異世界に転移して貰う。そう言うの、流行っているんだろう？

③ただしその代わり、異世界の言語能力に加え、一人につき一つだけ、ランダムで特別な力を与えよう！

と言った感じだ。

どうやら他のクラスメイトも同時に、別の空間？で同じ説明を受けているらしい。

それはとても理不尽でフザケタ代物だったが、しかし有は謎の光に反論することが出来なかった。

それは有が気弱だから――ではない。きっと此処にいたのが別の人間でも全く同じ反応を返した事だろう。

謎の邪神？だが、確かに何故か日本のサブカルに精通している上に、所々で妙にフランクである。しかしながら、そんな事を気にする事ができないほどに、存在感が人の域を遥かに凌駕しているのである。

彼の者が喋るたびに空間が震え、有は失神しそうな程の衝撃を受ける。

大地震や大津波に対して、どうしてこんな酷いことをするんだ!!なんて語りかける人間が居ないように、徒人である有に出来るのはただ震えて猛威が去るのを待ち続ける事だけだったのだ。

「さあ、お前の運命を決する賽を振るが良い」

「うあ……」

その言葉と同時に、有の目の前にちやちなガチャガチャの機体の様な物が現れた。

これでスキルガチャを引け、ということらしい。

もっと豪勢なものをいくらでも出せるだろうに、態々こんな粗末な物を出してくる辺りが、目の前の存在の悪意を物語っている様に、有

には感じられた。

けれどもやはり、抵抗は出来ない。

有は無言の圧力に負けて、おずおずとガチャガチャのレバーを回すしか無かった。

どう考えても、絶体絶命で最悪の事態。しかし、ここで流れが大きく変わる。

有がレバーを回した途端、ガチャガチャが強く光り輝き、中から七色に煌めく野球ボール程の大きさの球体が出てきたでは無いか！

「おめでとう！排出率0.0000000001%のSSRスキルだ!!」

「……えっ、えすえすあーる？」

「それは持っているだけで英雄になれるのが、ほぼ確定するような強力な能力の一つ。些か興ざめではあるが、引かれた以上は是非も無し。素直に授ける事でしょう」

どうやら有は、ほとんど出す気の無かった当たり籤を引いたらしかった。

どこことなく面白くなさそうな雰囲気を見るに、かなり有用な物らしい。

それを悟った有の頭の中に1つの考えが浮かび上がる。彼は、身を焼き尽くさんばかりの恐怖心をなんとか押し殺して、その考えを実行する。

「あのっ……」

「ふむ？」

「で、出来たらその力を、ボクの代わりに■■■という子に与えてはくれませんか……！」

そう。有が思いついたのは、引いたSSRスキルを、同様の目に遭っている筈の幼馴染の少女に自分の代わりに与えて貰う事だった。

その結果、自分が辛い目に遭うのだとしても、今こそ彼女を守る時だと思ったのだ。

——有は、気弱で情けないが、しかし自分が危ない時でも他人の事を思いやれる優しい人間だった。

「それは認めない。しかし恐怖を押し殺して、提案した事は評価しよう！お前たちの転移場所は無作為ランダムで決まり、互いの場所を把握する術はないが、お前には特別に今から1年後に、その相手の居場所が分かるスキルを付与してやろう！」

「あ、ありがとうございます……」

礼を言う必要など全く無かったし、そもそも直ぐに分かるのではなく1年後かよ、と言う話だが、それを馬鹿正直に伝えて気を悪くさせて、与えられる力を没収されては元も子もない。

「それに一つだけ忠告しておいてやろう。禍福は糾える縄の如し——これを努々忘れないことだ」

「それは、どういう……？」

有の疑問に邪神は答えない。

その代わりに、有の全身がとても大きな浮遊感に包まれた。

どうやら、異世界転移が始まるらしい。

「さて、それでは精々良い人生を送るが良い。最後に引き当てた能力

を受けよう！お前が引き当てたのはSSRスキル『戦乙女』ヴァルキュリア。女の身でしか扱えないスキルだが、何！此処まで来てそんな事を言いはせぬ。使いこなせるように肉体を変えておいてやろう！」

「……え？……あの？……え？」

最後に不穏な言葉を聞いて、有の視界は再びホワイトアウトしていった。

小鳥の囀りが聞こえる。川のせせらぎが耳に入る。穏やかな陽の光が身体を包み込み、木々たちによって澄んだ空気が鼻孔を撫る。

気が付いた瞬間、有はそんな長閑な森の一角に佇んでいた。

先程までの何もない真っ白な空間でも、元いた教室でも無い以上、本当に異世界転移とやらをしてしまったのだろう。

しかし、今の有にはそんな事を気にしている余裕は無かった。

「こ、これっ……」

何故だろうか、声が妙に甲高い。なんだか視界も頭一つ分くらい低く感じるし、自分の手を見てみると、肌がとても白くて柔らかそうだった。短く切りそろえられていたはずの髪がとても長くなっていて、オマケにした覚えのない三つ編みになっている。

有は、気を失ってしまいそうな意識の中、ふらふらと夢遊病の様に歩き始める。その足の向かう先は近くに流れている綺麗な川。

たどり着いた有は、止めどなく湧き上がる嫌な予感に従って、川の水面に自分の姿を映した。

「う、そ——」

二次元のキャラや、そのコスプレでしか見ない様な青い髪は、しかし一切の不自然さを感じさせず、滑らかで艶やかだ。

オレンジ色に近い明るい紅色の瞳は、昼と夜が交差する夕暮れの一瞬を思わせ、どこか郷愁すら覚えるよう。

氷の彫像の様に整った顔立ちはどこか冷たい印象を与えながらも、しかし同時に感じるあどけない雰囲気それを打ち消し完全なる調

和を成し遂げていた。

華奢な体は、けれどもとても柔らかそうで、思わず抱きしめたくなくなるような魅力に溢れている。

唯一の欠点^{救い}は、胸は比較的小ぶりということだけだろうか。

そんな、神話の世界の戦乙女のような美少女がそこに居た。

……何故だか、有が着ていた手井江洲高校の男子生徒の制服に身を包んで。

有が思わず手を自分の顔に当てると、水面の彼女も同じ様に動いた。もう、自分を誤魔化せなかった。

「ボク、女の子になっちゃった……………」

これが、幸運の後に待ち受けている不運だと言うのか。

生まれ故郷どころか、元の性別すら失った有に出来たのは、そんな風に力なく呟く事だけだった。



LEVEL1:『戦乙女』と『愛の神の加護(劣化版)』

「はあ……………」

気持ちの良い天気の下、穏やかな森の中をとてつもない美少女が、しかしとても沈み込んだ様子で歩いている。

何を隠そう、つい先程美少女に「Sして異世界転移させられたばかりの有である。

(とりあえず、人の居る所に出なきゃね。でも、はあ……、この姿で人と話さなきゃならないの……?)

自分の肉体を失ってしまったという、衝撃の展開に沈み込んでいた有だったが、しかしながら異世界のどことも知らない場所に放り込まれた現状は、彼ならぬ彼女が吞気に沈み込んでいる時間を与えてはくれなかった。

一見、穏やかに見えるこの森だって、どんな危険があるのか定かではないのだ。

落ち込むのも何をするにしても、まずは身の安全を確保してからだと、沈む心を奥へ奥へと押しこんで、街か何かに出るのを願って、とぼとぼと歩いているのである。

それは、一体どれだけ時間がかかるのか、そもそもゴールがあるのかすら定かではないマラソンの様な苦行であったが、しかし意外にも直ぐに変化は訪れた。

森の中で、放置された小屋の様な物を見つけたのである。
しかもそこに入っていく、人の姿まで見ることが出来た。

ただそれは――

（あれ？もしかして肝川君……？）

――自分と同じ制服を着た男子の姿であった。

つまりは、同じく邪神による異世界転移に巻き込まれたクラスメイトの内の一人と言う訳だ。

転移場所はランダムの筈だったが、偶々近くに現れた上に川沿いを歩くと言う考えが一致していたのだろう。

極めて貴重な同胞との接触のチャンスであった。

（ど、どうしよう……？声、掛けた方が良いよね……）

にも関わらず有が躊躇したのは、見つけたのが苦手な相手だったからだ。

肝川^{きもかわ} 達夫^{たつお}。有と同じく手井江洲高校の生徒である。

そんな彼がどんな人間かを一言で簡単に表すのなら――キモオタであった。

学校の休み時間中に、明らかに学校に持ち込むのは相応しくない肌色面積の多い女の子のキャラが映った漫画や小説、ゲームなどを我関せずとばかりにニヤニヤと気色の悪い笑みを浮かべながら見ている様な人間だった。

だから、いじめられていると言う訳ではないが、クラスメイトたちからどこか敬遠されているのが達夫と言う男子生徒の実情である。

気弱で押しが弱い有としても、自分の世界に入り込んで捲し立ててくるタイプの達夫は、正直苦手であった。

少なくとも、身体がこんな風になっちゃってしまった状態で気軽に話しかけたい相手ではない。

それに何故かとても嫌な予感がするのだ。

ここで取る選択肢を間違えたら、人生が終わってしまう様な――そんな正体不明の焦燥感すら感じる。

……幸い、達夫の方は有の姿に未だ気が付いていない。

今ならば、何も見なかった事にして、この場を立ち去る事も可能だ。しかし――

（……駄目だね、そんな風に決めつけちゃ。それに肝川君だってこんな場所に一人で心細い筈だし）

けれども、有の心の中の優しさが、彼女にその選択肢を選ぶ事を許さなかった。

幼い頃に周囲からのレッテル貼りに悩まされた自分が、直接的にと

ても嫌な事をされた訳でも無い相手の事を、勝手に決めつける様な真似をしてはいけないと思ったし、それに邪神曰くとても強力なスキルとやらを運よく入手した自分は、クラスメイトの手助けをするべきだと考えたのだ。

だから有は達夫に話しかける事に決めた。

——結論だけ述べるなら有はこの時、達夫の事を見捨てるべきだったのだ。

まず一点。有が先ほど突如として覚えた凄まじい悪寒は、苦手な相手に対する嫌な予感等と言ったちよつとしたものなどでは決して無い。

それは、邪神から与えられたSSRスキル『戦乙女』が持つ、いくつもの有用な力の内の一つ。

『直観』と言う、自身の身に降りかかる良い出来事や悪い出来事を、その種類と度合いに応じた予感を覚える事で知らせてくれるという能力による物だった。

もし仮に、その事に気が付けていた後だったのなら、有はもっと警戒をしていただろう。

そしてもう一点。それは邪神からの忠告にもあった言葉だ。

禍福は糾える縄の如し。幸運と不運はコインの裏表。だから大きな幸運が起きた時には、不運に足を掬われない様に注意すべし。

有は、自身の身に降りかかった不運を女性の体に成ってしまった事だと思ったが、それは違う。

そもそも、邪神の暇つぶしで始まった此度のクラス全員異世界転移。その難易度は、まあ酷い物だ。

50%の確率で引いてしまうZスキルは、殆ど意味のないゴミ。

47%のRスキルは、ピンポイントで役に立つ場面こそあるが、それは必ずしも異世界で生き抜くのに必要な方向性ではない。

ほぼ3%の低確率のSRスキルを引き当てれば流石に多少は楽になるが、それにしただって身寄りも信用も無い身で、異なる世界に放り出される代わりになるかは怪しい所だ。

故に、手井江洲高校2-C組30人のこれからの運命は酷い物である。殆どが死ぬか、奴隷に墜ち。偶々上手く行った数人だけが、なんとか辛うじてやっていける程度と言う地獄絵図。

しかし、奇跡的な確率を潜り抜け SSR スキルを引き当てた有だけは、その例外だった。

SSR スキルは、正しく英雄への直通列車。他のランクのショボいスキルとは一線を画すチートである。

もしも仮に有がこのまま何事も無く時間を過ごせたのなら、彼女に待ち受けているのは輝かしい栄光の運命だった。

奴隷墜ちしかけていた幼馴染の少女や、異世界の美少女たちをスキルの力で颯爽と救い、彼女たちから慕われる順風満帆な異世界ライフ。

そんな素晴らしい運命が有には待ち受けている筈だったのだ！

だから有は、女になった程度では無くならない程に、自分が未だ幸運の最中であつたと認識しておかなければならず、そして、その揺り戻しの不運を細心の注意を払って警戒するべきであつたのだ。

何故なら、『戦乙女』のスキルに未だ全然慣れていない、今この時、この瞬間こそが、有にとって最大最悪の死地だったのだから！

「あ、あの……」

「んん？」

人気のない小屋の中、琴の音の様に澄んだ声で、有は不健康そうなガリガリノツポの男——達夫に声を掛けた。それによって有の存在に気が付いた達夫だったが、有の姿を見た瞬間に彼の動きが一瞬止まる。

そして次の瞬間に、彼は逆に激しく叫び始めた。

「り、リアルゆーたんキターーーーーー！！！！」

「……え。えっ……？な、なに……？」

行き成り騒ぎ始めた達夫の姿に有は激しく混乱する。

確かに、ボクの名前は有だけど、ゆーたんなんて呼ばれるほど親しくないし、そもそも親しくてもそんな呼びかたはして欲しくない、と目を丸くする。

しかし、口下手な有が上手く言葉を紡がない間にも、達夫の早口キモオタトークが次々と捲し立てられていく。

「ああっ！ゆーたんってのは、俺の今の一押しソシヤゲのユグドラシルファンタジー、通称ユグファンに出て来る嫁の事なんだあ。その名も『天の踊り子』ユーフォリア！青髪爆乳の美少女でえ、種族が天使って設定だからちよっと普通の人間とは感性がズレててえ、無口でクールな不思議ちゃんなんだあ！あ、でもでもおゝ、最初はそっけない態度だったけど一度デレてからは甘々でえ、この前のイベントでなんか一日中おっパイ枕で添い寝してくれてたりしてゝ」

（き、聞いてないのにつ。それにそんな事を話している場合じゃ……）

「あの、ボク――」

「ボクっ娘キターーーーーー！！！！」

「ひう!？」

「キミ、本当にゆーたんにそっくりだよお!……まあ、おっぱいが足りてないのだけがちよっと残念だけどお」

「ひっ……」

(視線が粘ついて……)

達夫の舐め回すような視線に、有は生理的な嫌悪を感じる。

それにしても全く話を聞いてくれない。

やはり、こういうたにかく捲し立ててくるタイプの事を有はとても苦手だった。

しかし状況が状況故に、そんな事も言っていられない。

「とにかく、ボクの話聞いて……!」

「ん?」

有が彼女にしては珍しく声を荒げる。

そこまでして漸くマトモな会話が出来るようになって、有はなんと

か現状を達夫に伝える事が出来た。

「——と言う事なんだ」

「へえ。まさか、キミが本原君だとはねえ」

（よ、漸くマトモに会話出来た……）

如何な達夫とて、いくら何でもクラスメイトの事くらいは覚えていたらしく、流石にかなり驚いている様だった。

「そうなんだ。スキルの影響で——」

「？イキナリ黙ってどうしたんだい？」

（そ、そうだ！スキル！スキルだよ！）

有は達夫と話している最中に、とある事を思いついた。

スキルの所為で変化してしまった肉体。ならば、元に戻せる様なスキルもあるかもしれない、と。

「……スキル。肝川君のスキルはどんな物？ボクの身体を戻せるものだったりしない？」

「ああ、スキル。スキルね……。ふひっ！」

「肝川君？」

有の縫るような願いを聞いた達夫が奇妙な反応を返す。

なにかに気がついた様にハッ！とした後、厭らしい笑い声を零したのである。

「ああ、ごめん、ごめん。何でもないよお。それで、俺のスキルだったね。うーん、残念だけどお、大したスキルじゃ無いんだあ。何が出るかはあ——まあ、実際に見て貰った方が早いと思うからちよっと近づいてくれない？」

「う、うん……」

そう言つて達夫は、有に向けて自らの手を翳した。

それに、何処となく不穏な雰囲気を感じた有だが、自分から質問した手前、気弱な彼女は達夫の言う通りにすることしか出来ず、彼に近づいてしまった。

「それじゃあ、発動まで少し時間がかかるからちよっと待ってねえ……。10、9、8、7、6——スキル『劣化愛の矢（「本限り」）！！！！』」

「……………え？」

カウントを無視して、達夫が勢いよく何かしらのスキルを発動させた。

途端に、彼の手から有に向かって、ピンク色のエネルギー体で出来た、先端がハートの形になっている矢の様な物が飛び出した!!

……もし。もしも仮に、有が後、数日。最悪一日だけでも新しい肉体と、スキルに慣れる時間が合ったのなら、この状況から身を躲すことも可能だっただろう。

何故なら『戦乙女』のスキルは、少しも鍛えていない現状ですら、銃弾を見てから躲せるほどの身体能力を有に与えてくれているのだから。

しかしどれだけ高性能なスーパーカーだとしても、アクセルの踏み方すら知らないようでは、その真価はまるで発揮出来ない。

有は、虚を突かれた事も相まって、自分に向かってくる桃色の矢を、ただ呆然としながら見つめることしか出来なかった。

そしてエネルギー体の矢は、そのままの勢いで有の額にぶち当たる。それによって有に傷が付く事は無かったが、しかし代わりにピンク色の矢が、まるで溶け込む様に、有の頭の中に消えていって——そして、その瞬間。

[illegible]

有の口からとても大きな叫び声上がる。

それは、ひとの口から出ては絶対にいけない類の怪音だった。

*
*
*
*
*

一体、有の身に何が起ったのか？

それを説明するためには、達夫が邪神から与えられたスキルを説明せねばならない。

彼が、スキルガチャで引いたのは、**マスキル『愛の神の加護（劣化**

版)』。

効果としては、

- ・性技・淫具作成の技能の成長率が増加する。
 - ・スキル『劣化愛の矢(一本限り)』が使用可能。
- と、言うものである。

そして達夫が、先程有に向けて放ったスキルこそが、『劣化愛の矢(一本限り)』であり、その効果は以下の通りになる。

○『劣化愛の矢(一本限り)』

- ・対象を決めてエネルギー体の矢を手から放ち、それが当たった場合対象の自分に対する感情が【愛情】に変化するまで感情値を与える。
- ・このスキルは生涯で一度のみ発動可能。
- ・このスキルは異性に対してのみ発動可能。
- ・このスキルは対象の状態異常耐性を貫通する。
- ・このスキルが発動した場合、その影響を対象者は認識出来なくな

る。

・このスキルの影響は、スキルの発動から一年後に消失する。

要は、当てた相手を恋に落とせる矢を一度だけ放てるという事である。

さて、この説明を聞いた者の中には、なんて強いスキルだ！なんて思う人も居るかもしれない。

まるで、エロ漫画やゲームに出てくる強力な洗脳・催眠能力みたいだ！と。

しかしそれは大きな間違いだ。実はこのスキル。本来、そこまで大したものではない。

まず一つ。とても重要なのは、このスキルにはそう言った洗脳能力における重要な部分が存在しないという事である。

それは、与えた感情を維持する機能。

要は、このスキルに出来るのは当たった相手を恋に落とす事まで、そこから自分の力で関係を維持しなければならないのである。

例えば普段、自分の事をキモがっている女子相手にこのスキルを使ったでしょう。

その場合、少しの間だけ相手を恋に落とせる訳だが、その後すぐに「私、何でこんなキモい奴を好きになってるんだろう？」と好感度が下がって言って、また嫌われるという訳である。

つまり、このスキルで恋人なりなんなりを作りたいのなら、そもそも相手に好かれるような人間でなくてはならないという事で………

…それならそもそもこんなスキル使わないよ、と言う話だ。

また、もう一つ。このスキルに、恋をさせる以外の認識・常識改変の能力は無いということだ。

一応、スキルの発動と効果に違和感を覚えなくなる効果はあるが、それは本当にそれだけの効果でしかない。

人妻に使えば「私、夫が居るし……」となるし、家族に使えば「い

や、家族だし……」となつてしまふだろう。

だから、このスキルは本当に大したものではないのである。

そもそも、有に此処で出会っていなかった場合、達夫は近くの街で好みの女性にこのスキルを使い恋に落とすのだが、前述の通りすぐに嫌われて一度のセックスすらすることなく放り出され、そのままどうすることも出来ず死亡する——そんな運命が待ち受けていたのだ。

そんな程度の大した事の無いスキルなのだ。

ただしそんなゴミスキルにも、一応裏ワザ的な使い道は存在する。まあスキルの裏ワザというよりは、人の心や頭の機能の誤動作と言ふべきなのだが、一度に大量の感情を与えた場合、それが焼き付いて戻りにくくなるという物だ。

要は、人が人を好きになる状態の数値を100だとするのなら、このスキルはその数値になるまで感情値に＋を与えるものである。

そしてその場合、最初から自分に対する感情が66の相手に使つても効果はたったの＋1だが、0の相手に使えば＋100、-100の相手に

使えば＋200と、相対的に効果が上がっていき、致命的な影響を及ぼしやすくなるということだ。

そういう意味では、人に好かれやすいハイスpekなイケメンよりは、キモオタである達夫の方が活かしやすいスキルではあると言える。しかしながら、この裏ワザにも明確な難が存在している。

それは、相手に完全に恋心を焼き付けさせるためには、一度に相当な量の感情を与えなければならず、そこまで嫌われるのは並大抵の事では無いのである。

それこそ、「こいつ、マジキモい……。生理的に無理……」程度の嫌われ具合では、かなり上手くやってギリギリ一度性行為に持ち込むことが出来るかどうか程度の効果しか発揮されない。

人が人を嫌うというのは案外パワーを使うもので、生理的に無理なんてものは表現としては使われても、実際にそこまでである事は中々に無いのだ。

それこそ、エロ漫画に出てくる洗脳能力レベルで効果を発揮させようと思ったら、幼い少女の眼の前でその家族全員を惨殺して復讐心を植え付けて、10年以上復讐者として自らを追わせた末に使うくらいはしなければならぬ。

だから、そんな面倒くさい事を出来るなら、もつといくらでもやりようがあるだろ!?!と言う話である。

しかもそこまでやっても認識改変は出来ないのだから、最悪無理心中されかねないのだから、どれだけ使い難いのか分かって言うものである。

纏めれば、この『劣化愛の矢（一本限り）』と言うスキルは、無意味とまでは言わないが、額面ほどには強くなく、とても使いにくい能力だと言うことだ。

――では、どうしてそんな大した事が無いはずのスキルを食らっただけで、有はこれほどまでに異常な状態になっているのだろうか？
スキルの効果がそこまででは無いことは、先程まででくどいほどに

説明をした。

ならば、この異常の原因はスキルを受けた側——つまり、有に何かしらの問題があるという事である。

そう、その問題。それは有が「S娘である」と言う事だった。

今でこそ女性の肉体になってしまった有だが、その性自認は完全に男であり、また恋愛対象も女性である。

だからこそ、有にとって達夫に恋をするなんて、それこそ生理的にあり得ない事だったのだ。

例え、有が達夫とどれだけ仲良くなったとしても、それで発生する感情は【友情】であり【愛情】では決してない。

そこにあるのは『常識』と言う余りに巨大で硬い壁。

天に浮かぶ太陽が突然落ちてくると真面目に思う人が居ないように、踏みしめている大地が突如消失すると警戒する人が居ないように、有にとって男性と愛情を育むなんて事は、考えにすら浮かばない事であつた。

けれども今、そこに強制的に至らされようとしている。愛情

結果として有に与えられるのは、件の全てを奪われて復讐者にさせられた場合の時すらをも、遙かに上回る恋心の大津波。

成功を約束されていた筈の有の未来が、ここに来て完全にズレて穢され始めた。



[illegible]

（あたま、いたいっ……！）

注がれる。注がれる。注がれる。

腐った蜂蜜のような、甘い腐臭を放つ偽りの恋心が、際限なく有の頭の中に注がれる。

まるで、脳みそをかき混ぜられているかのような感覚。

瞳は虚ろで、口は半開き。腕はだらりと垂れ下がり、全身が時折強力な電流を流されたのかの様に、ビクン！ビクン！と痙攣している。

「ほへっ、ほひよっ、ほへへへへへっ!?!?」

（ボクは……。ボクは、肝川君の事が、スキ……。？）

有に抗うすべは無い。遂にその本来誰にも侵されざるべきであるはずの聖域である恋心が、土足で踏みにじられる。

「はひっ……？はひひっ……？」

（でも、何で？何で、なんで、なんで、ナンデナンデナンデナンデナン
デナンデ……ソウダ。小さい頃カラ、いつも助けてくれていたカラ

……)

ただでさえ、生涯最悪の目に遭っている有だったが、そんな彼女に容赦のない追い打ちがかかる。

小さな頃から好きだった幼馴染の少女。そんな彼女との思い出やそれに付随する感情が、有の中で達夫に対しての物だと差し変わり始めたのだ。

先も言ったが、スキル『劣化愛の矢（一本限り）』に、この手の認識改変能力は存在していない。

しかしながら、それが実際に起こってしまっているのは、やはり人の機能の誤動作による物だった。

人間の記憶や認識と言う物は、しっかりしている様で、意外とあやふやな所がある。

あまりに辛い出来事が続き本来のものとは別の人格が作られる。砂漠等で脱水症状によって死にかけてありもしないオアシスの姿を幻視する。記憶喪失の人間が周囲の言葉に影響されて、間違っている筈

の記憶を真実の物だとして思い出す。そんな例は枚挙に暇がない。

そして、たった今。有の身に発生しているのもそれらに似た事例だった。

男に恋愛感情を抱くなど、そもそも考えの端にすら浮かんだ事すらなかった有。

そんな彼女に、達夫に対する愛情を覚えさせるべく、偽りの恋心が注ぎ込まれている。

それは余りに大量で、しかも致命的な物だった。

有の感情の中でいくつもの矛盾が発生して、下手をすれば精神が崩壊しかねない状況ですらある。

そんな未曾有の危機に対して、有の肉体が選択してしまったのは、少しでも整合性を整えて、精神の崩壊を防ぐという物だった。

それこそが思い出の捏造。

幼馴染の少女との思い出を、達夫と過ごしたものと差し替えれば、かなり精神にかかる負荷が弱まるのだ。

それは、熱い物を持ったら反射的に手を放す様な肉体の反応で、仕方のない物ではあったが、しかし今の状況においては最悪の一押しだった。

確かに、そうする事によって、この場で直ぐに精神崩壊に至る事だけは避けられる。しかしながらそれは同時に、極僅かに残っていた逆転の目が無くなる事も意味していた。

もしも仮に有が、幼馴染の少女への思い出を達夫との物だと差し替えられず、また精神崩壊もせずにこの場を乗り切れていたのなら、その思い出と、少女に対する想いで、達夫に与えられた偽りの好感度を少しずつ下げて行って、その呪縛から逃れられた可能性があったのだ。無論。容易い事ではない。

言ってしまうえば、針で山を崩すが如き方に一つもない可能性だが、しかし確かに奇跡の逆転の芽はあったのだ。

しかし今、その芽はアツサリと見つかつてほじくり出され、何度も何度も靴の裏で執拗に踏みつぶされてしまっているのである。

（――――だからボクは、彼の事が好きなんだ）

そして遂に、胸に秘めた純な恋心すら奪われた。

よりにもよって、助けようとしてくれていた相手に、こんな真似をする下衆に。

こうして、本原 有と言う少女（少年）は、肝川 達夫と言うキモオタにガチ恋させられてしまった訳である。

「おい。ゆーたーん」

「ん、あれ。ボク……？」

「どーしちゃったのお？突然」

そうして、有は再起動を果たした。

自分が、何らかの干渉を受けたと言う事実を、『劣化愛の矢（1本限り）』の効果で認識することの出来ない有は、自分に起きてしまっ

た悲劇など知る由もなく、顔に微笑を浮かべた。

「……あ、ゴメン、達夫。少しぼーっとしてみたい」

そう喋る有には、最初の時の気まずさが一切見られない。そこにはただ溢れんばかりの親しみが満ちていた。

それを見た、達夫は、ニチャア……と、気色悪く顔を崩した。

「いやいやあ。色々と会ったから仕方が無いよお。でも、ゆーたんと合流出たのは、不幸中の幸いだったなあ」

「うんっ！達夫と離れ離れにならなくて良かった――！」

「……………！でも、体がそんな風に変わっちゃって、大変そうだね、ゆーたん」

「そう、だね。正直、かなり気が沈んじゃってるかも……。だけどその分、強いらしいから。何時もとは逆に達夫を守れるって、ポジティブに思うことにするよ」

「……いつも？」

「うん。こんな時に言うのもなんだけど、達夫は小さな時から、ボク

の事を守ってくれてたから……。今度は、ボクが頑張る番だよね！」
「……………いやあ。幼馴染としては当然の事をしたまでだよお。
でも、うん。素直に頼りにさせてもらおうかなあ…………！」

「えへへ……。頑張るね♪」

有は、胸の前で可愛らしく両手をぎゅっ！と握りしめた。

その微笑ましさととは正反対に、達夫は爬虫類を思わせるようにじつ
……と、有の事を観察していた。

自分のスキルがどれほど有に効果を発揮したのかを見極めていた
のである。

そして彼は、どうやら自分が有にとっての幼馴染の少女の立ち位置
を乗っ取った事に気がついてしまったらしい。

「それはそうと、何時までも、ここで喋ってる訳にもいかないよねえ。
とりあえず、川沿いを歩いて人が居る場所を探そうよお」

「あ、うん。そうだね」

「さ、行こうか」

そう言つて、結局何の収穫もなかった小屋を出て歩き始める人。
そんな達夫が有に近づいて、馴れ馴れしく彼女の肩に手を回し始めた。

「……?どうしたの、達夫」

「いや、ちよつとね。ほら、これからも仲良くやっていこうよつて言う意思表示……みたいなの？」

「ふふっ、変な達夫」

達夫の突然の行動に、有は疑問こそ浮かべたものの、しかし不快感は一切表さなかった。

それを確認した達夫は、あろうことか有の小ぶりな、しかし確かに女の子らしい膨らみと柔らかさがあるおっぱいを、服の上から揉み始めたのだ。

「……っ!?た、達夫？」

「……………」

「あの……。えと……」

有の困ったような言葉に、達夫は答えない。

もみもみ♥もみもみ♥と、本来、彼の様なキモオタには一生縁のない、超絶美少女のおっぱいを無遠慮にひたすら揉みしだく。

それに対して、一瞬何かを物申そうとした有だったが、結局口に出すことは無かった。

彼女は、その極めて整った顔を林檎の様に真っ赤に染めて、達夫のなすがままにされていた。

片や胸を揉みながら、片や胸を揉まれながら、何とも言い表し辛い行動を取りながら、二人は互いに無言で川沿いの道を歩く。

「ひひひっ——！」

「……………っ!？」

現時点でもう既に、好き勝手に動いている達夫だが、押しに弱い有が抵抗出来ないのを良い事に、その行動を更にエスカレートさせ始めた。

体が全体的に一回り小さくなった影響で、ぶかつ、とした有のワイシャツ。

達夫は、その胸元から自分の手を差し込んだのである。

マシユマロの様に柔らかくてすべすべな、生おっぱいが下品な手つきで撫でまわされる。

有は、思わずビクツ！と体を震わせたが、しかし達夫は気にしない。そのままその指先で、綺麗な桜色の突起を摘み上げるなんて蛮行に出て――

「――痛いっ!？」

「おっとお！」

「き、興味があるのは分かるけど……。流石にもう止めて……。？」

「ごめん、ゴメン！ちよっとやり過ぎちゃったよお。それにしても、適当に触っても簡単には気持ち良くならないんだねえ」

「えっちな漫画じゃないんだから、そんな風にはならないよ……」

「うーん。リアルはやっぱ二次元とは違うなあ。後、ゆうーたんの今

の姿、ユーフォリアさんにそっくりだけど、胸が小さいのだけが残念だなあ」

「一杯、触った後に残念そうにしないで……？それに、これで胸まで大きかったら、感覚が違い過ぎてボク、混乱しちゃうから良かったよ」

「えー。俺としては健やかに育って欲しいけどなあ、ふひっ！」

「嫌だよ……」

流石に我慢できなくなった有の口から、制止の言葉が飛び出した。達夫も深追いはせず、有の胸元に差し込んでいた手を直ぐに引き抜いた――ただし反省の色は一切見えなかったが。

途中まで、されるがままになっていたとは言え、散々凄まじい洗脳を受けたと言われた割にはマトモな反応を見せる有だが、それも当然の事だ。

何度も言ったが、有が達夫のスキルによって変わってしまったのは、極めて大きな恋愛感情を持たされたのと、幼い頃の思い出が乗っ取られてしまった事だけなのだ。

少し体を触れられただけで、気持ち良くなってしまうエロゲヒロインボデイになった訳でも、常識を弄られて恥ずかしい事を恥ずかしいと思えなくなった訳でも無いのである。

……ただ、それが有にとつて幸運か？と問われれば、答えるのは難しかった。

（――っ。た、達夫にあんなに触れられてっ……！うれし――だ、駄目だ、こんな風に思っちゃ！ぼ、ボク、男の子なのに、喜んじやったなんて知られたら、達夫に気持ち悪がられちゃう……！）

「……？どしたの、ゆーたん。ぼーっとして」

「――あっ!?何でもない、何でも無いよっ！さ、暗くなる前に、人っている場所が見つかるように、早くいこっ？ね？」

「んん？まあ、良いかあ。それもそうだね。これからの事は落ち着ける場所で話せば良いもんねえ」

表面上は何とか取り繕っている有だったが、その内面は余りにも、ぐちゃぐちゃだった。

基本的に恋愛感情以外は弄られていない——それはつまり自分が男であり、男性は恋愛対象者ではないという常識を持ったまま、しかし同性である筈の達夫に対して底が見えない程の愛を感じてしまっているという事だった。

——達夫に何かをされると、凄く嬉しい。求められると、心が一杯弾んでしまう。

けれどもそれはおかしい事で、表に出してしまったら変に思われてしまう。

そんな、苦悩が有を苛んでいた。

どうせ、無茶苦茶にされるのなら、常識や人格も一緒にされてしまえば、少なくともこんな苦悩は感じなかっただろうに。

これでは、精神的な拷問も同然だった。

「それじゃあ出発。ふひひっ、これから楽しみだねえ、ゆうたん」
「……う、うん」

（ボクが、達夫の事が好きなのはバレない様にしないと……）

偽りの恋心に翻弄されて、有は一人悲壮な覚悟を決める――その相手は、自分に欲望の限りを尽くそうとしていると言うのに。

これより彼女の人生を終了させる、逃れようのない、淫らで淫靡なクエストが始まる――。

LEVEL2 それはまるで、男の趣味に合わせるメスの様に

「BUMOOOO——!!」

「……………」

薄暗い森の中。辺りを震わせる獣の唸り声が轟く。

そこに居たのはイノシシとマンモスを組み合わせたかのような、極めて巨大で凶暴そうな怪物だった。

恐らく全長10mは超えているであろうその威容。それが虚仮威しで無いことは、周囲にそびえ立っていた、しっかりと地面に根を張っていたはずの大木が、幾つも無残になぎ倒されているのを見れば、否応なしに理解できるだろう。

そんな規格外の怪物と、一人の人間が、今、対峙していた。

サイズが一回り大きい男子高校生の制服を着た、滑らかな青色の長髪を後ろで三つ編みにした美少女——女体化してしまった有である。

戦う意思がするのか、手に申し訳程度に銀色に鈍く光る——西洋剣「ロ

ングソード』携えているが、その姿は余りに頼りない。

全身が筋肉で出来ていそうな巨大イノシシマンモスと見比べれば、最早全身がマシユマロで出来てそうな可愛らしさで、到底戦いになるとは思えなかった。

しかしながら両者の様子は寧ろ、その予想から正反対で、どこか必死に威嚇をしている様な獣に対し、有は震え一つせずとその様子をただ、じっ……と見つめているだけだった。

「BUMOOOO——!!」

そして状況が動く。決意を固めたかの如く、咆哮を上げ、像の牙によく似た白く長く鋭いゝ本の牙で有を串刺しにすべく、突進したのだ！

山の様な巨体が、華奢で繊細で小柄な肉体に迫る。

それはさながら、大型トラックと人間の衝突事故を思わせる光景で、見れば誰しも数秒後に広がるであろう凄惨な光景を想像せずにはい

られないだろう。

「BUMO?」

しかしながら、実際に起こった結末はどうしようもなく現実離れしていて、ある意味想像以上にショッキングな光景だった。

自らに向けられた、白い牙。貫かれれば、胴体の大半が消し飛んでしまう程に巨大なその先端を、有は自分の小さな手で掴んでいた。それだけ。たったそれだけで、獣の突進が止められたのだ！

その威力が虚仮威しで無い事は、突進の為の踏み込みで、大きく陥没した地面を見れば一目瞭然だ。

実際、木々どころか、鉄筋コンクリートで出来た高層ビルですら一撃で倒壊させてしまえるだけの威力が、獣の突撃には秘められていた。だと言うのに、有は傷一つ負わないばかりか、本の僅かに後退させられることも無く、アッサリと止めてしまったのだ。

「えい」

「――!？」

有が牙を掴んだ手を、くるん！と回す。すると、何トンもある筈の巨大猪の体がまるで見せかけだけのバルーンアートの様に軽々と持ち上がり、周囲の木々を巻き込みながら仰向けに転がされてしまったのだ。

巨大猪からすれば、突然天地が逆さまになったかの様な感覚だろう。声なき悲鳴を上げながら足をバタつかせる事しか出来なかったのも、仕方が無いと言える。

そんな風に混乱する巨大猪の体に、有はしっかりと足取りで更に接近する。

それと、同時に有が持っていたロングソードが、神々しい白い輝きに包まれ、彼女はそれを巨大猪の胴体に押し当てた。

まるで切れ味の良い包丁が実演販売で肉を切り刻んでいる様なくらいに簡単に、ロングソードは巨大猪の肉を切り裂いていく。

何とか足をバタつかせて抵抗している巨大猪だが、常人であれば全身の骨と言う骨が複雑骨折してもおかしくないその抵抗を、有はやは

り意にも介さない。

「……………ゴメンね」

「————」

そして、ロングソードに纏われていた光が槍の様に伸び、巨大猪の体を貫通する。

巨大猪はビクンツツ！と一度だけ体を大きく震わせた後、全く動かなくなってしまった。

有は目の前の怪物を、これほどまでに簡単に倒してしまったのである。

何と凄まじい戦闘能力。

しかしながら彼女が凄まじいのは、戦闘能力だけでは無かった。

『『アイテムボックス』『テレポート』』

有がいくつかの単語を小さく呟く。その度に思わず瞠目してしまうような異常事態が巻き起こる。

一度目は、巨大猪の死体が消失し。

〽度目は、有自身の姿が消失し、遠く離れた場所に現れた。

アイテムボックス
四次元収納に、瞬間移動。テレポートどちらもゲームではありがちな、しかし

実際にあったら有用どころの騒ぎでは無い能力だった。

「こんにちは。依頼、完了しました」

「ゆ、ユー・フ・オリアさん!? 何時の間に……! それに突然変異のワイルドボアをもう討伐されたのですか!？」

有が転移した先は何人も鎧や武器を身に着けた人間が、せわしく動き回っている建物の中だった。

受付の人間がいるカウンターが複数あったり、壁に掛けられたボードに何枚もの紙が貼り付けられている様子からは何らかの集会場であるかの様に見える。

そしてそれは正しい。ここは冒険者ギルド。やはりファンタジーではよく見る組織だった。

有は、受付カウンターの一つに足を運ぶと、どこか異国情緒あふれる制服に身を包んだ受付嬢に話しかけた。

「……死体は、いつも通り」

「か、確認させて貰います……！」

どこか、キャラを作っている様な感がある冷静でそっけない喋りで、クエストの達成を報告する有。

その様子を周囲は、「あれが、噂の……」や、「初めて見るが確かに……」なんて風に会話しながら注目していたのだった。

有とそのクラスメイト達が邪神の手によって、異世界に転移させられてから、早一カ月が経過した。

有と達夫の二人は、あの後アルケーと言う街に辿り着き、そこで生活を行っている。

どうやらこの世界はあちな、なんちゃってファンタジー中世らしく、有は魔物モンスターを討伐したり、ダンジョンを探索したりするのが生業

な、冒険者として生計を立てていた。

魔物は、強くそして恐ろしく、例え弱めの相手であっても平和な日本で育って来た普通の（元）男子高校生が戦えるような相手では無かったが、そこは流石にチートスキル持ち。

『戦乙女』のスキルの凄まじい効果は実に多岐に渡り、有は期待のスーパーキーとして早くも頭角を現し始めている程だった。

しかし手放して順風満帆と喜んで良いかは微妙な所で……

「ただいま、達夫」

「ゆーたん、おかえり〜」

冒険者ギルドを、またテレポートで後にして、有が到着したのは自身が拠点としている宿屋の一室であった。

ベッドが二つに、小さな机と椅子が置いてある程度の粗末な部屋。どう考えても一人用の部屋だったが、部屋に帰って来た有を、ベッドにだらしなく寝っ転がりながら達夫が出迎えた。

そう。有は、こんなプライバシーもへったくれない部屋で、達夫

と一緒に暮らしているのだった。

「これ、今日のお金だよ」

「ありがと、ありがとお。うん。それじゃあ、取り合えずこれくらいあれば良いから、後は保管しといて」

「うん。分かった」

有が、達夫に硬貨の入った麻袋を渡す。それは、100%有の力だけで稼いだお金だ。

しかしながら、達夫はその麻袋から無遠慮に好き放題お金を抜き取って自身の懐に仕舞い込む。

流石に全額自分の物にしたりはせず、有に返したが、それも有が稼いだお金だから彼女に返す、なんて態度ではなく、銀行代わりに保管しておけとも言わんばかり。

ちなみにこの一ヵ月間、達夫が自発的に稼いだ金額は0。

……………有は明らかに、紐男を養う都合の良い女として扱われているのである。

しかも、達夫から掛けられた負担はそれだけでは無かった。

「それにしても、ゆうたん。大分、演技も板についてきたんじゃない？」

「そう、かな……」

「そうだよお。すつごく、クール系美少女って感じ。もしも、ネットに今のゆうたんの様子をこ出来たら、リアルユーフォリアたんキターーーーって声が殺到するよ！」

「……………あんまり、嬉しくない」

「そうそう、それぞれ！そんな感じにクールに弦くのがチャームポイントなんだよお」

「今のは演技じゃない……………！どうして、こんな事……………」

冒険者ギルドで、有がユーフォリアと呼ばれていた上に、どこことなく態度が可笑しかったのは、彼女の意味ではなく、達夫の命令であった。

有は異世界に来て以降、本原　有改め、ユーフォリアとして、生活をさせられているのだ。

口調も、元々ある程度似ていたとは言え、口数が少なくどこかクルな女の子の様な物を強要されていた。

「またソレ？だあかあらあ、俺みたいに、唯の日本人が偽名や演技をした所で大して意味は無いけど、体が変わったゆーたんなら別でしょ？こういう転移物の場合、異世界人だったのは、隠せるなら隠したい方が良く！って何度も話したでしょ？」

「そう、だけど……」

一応、そういう理屈らしい。ただし……

（絶対、嘘だよお……）

当然の事ながら、そんな建前は全て嘘っぱちだ。

そもそも100歩譲って偽名を使う意味はあったとしても、口調や態度を変える意味なんてまるでない。

これらの行動の真意など、有の事を自分の好きな二次元キャラに近づけたいという達夫の欲望以外の何物でもありはしない。

そして、有——もといユーフォリアもその事には気が付いている……

…というか彼女は別に常識改変されている訳ではないので、そもそも最初から一瞬たりとも騙されていない。

ならどうしてこんな人権侵害を受け入れているのかと言えば――

「やっぱり、ボク。此処までする必要は無いと――」

「それに俺、今のゆうーたんの方が好きだなあ！」

「……………っ」

「基本、無機質なのに、どこか甘さを感じる声は脳味噌が蕩けそうになるしい。甘えん坊の猫みたいにそっけないと見せかけて、時々隠されてない甘さを感じるのは、スツゴク可愛いからねえ……………」

「…………あ。…………うあ♥♥」

有の発言を遮って繰り出される達夫の言葉は分類的には誉め言葉だが、しかしねっとり粘つく様なそれは、普通であれば嬉しさより気持ち悪さを感じるだろう。

しかしながらよりもよって対象になっているユーフォリアにだけは効果抜群な様で、彼女はみるみるうちに赤くなり、俯いてしまっ

た。

しかもその上――

「まあ、でも？ ゆーたんが嫌だ！ っていうなら強制はできないけどねえ。あゝあ、でも残念だなあ」

「……あの」

「ん？ どおしたんだい、ゆーたん？」

「ボク。もう少し頑張ってみる……！」

「あれ？ そおゝ？？？ 無理しなくてもいいんだよおゝ？」

「ううん。大丈夫、だから」

「いやあ、そんなつもりはなかったんだけどお、なんか無理を言った形になっちゃってゴメンねえ。まあでも、ゆーたんにはそっちの方が似合ってて、可愛いから！ マジ嫁って感じだから!! 絶対、そうした方が良いよお」

「……うん♥♥」

（だ、駄目な事だって分かってるのに。こんな風に思っちゃイケない

のに……。ボク、ボクっ……。！)

ユーフォリアは遂には断ろうとする意見を引っ込めてしまった。

その瞳と表情には、イケない事をしているという背徳感と、しかし隠しきれない歓喜の色が浮かんでいた。

——結局の所。ユーフォリアは達夫の事が大好きなのだ。胸がきゅん♡きゅん♡と高鳴るのを止められない。

彼の役に立てると嬉しい。

彼に褒められると嬉しい。

彼に求められると嬉しい。

だから、紐として彼を養った。

だから、ゲームのキャラを演じるなんて、非常に人を馬鹿にした事すらやっている。

だってそうすると褒めて貰えるから。愛しい人の役に立っていると実感できるから。

間違っているとは知っている。ダメだとも思っている。けれども、

どうしても止めることが出来なかった。

（精神的に）男同士なのに、こんな思いを抱いちゃイケないんだ：。と悩みながらも、達夫の役に立とうとするユーフォリアのその様は、ある種純愛的ですらあった。

まあ、最も。その苦悩の基本となる恋心が、卑劣な手段で植え付けられた偽物である以上、純愛（笑）であり、悲劇でしかないのだが。……因みに、もし仮にユーフォリア——いや、有が達夫の手に墜ちず、一人で行動できていたのなら。

彼女は、自分一人で異世界を生き抜く経験と、幼馴染の少女を自分が守らなくては！という強い決意で、人間的に大きく成長できる筈だった。

体は女になってしまったけれど、精神は寧ろ男らしく成れる。そんな成長が待っていた筈だったのだ。

しかし、それはもう無い。成人ゲームの女キャラを演じさせられていて、男らしくなるも何もある筈が無いだろう。

つまり、彼女は精神の成長の機会すら奪われていた。

ユーフォリアが（偽物の）恋心と常識の狭間で泣きたいくらいに苦悩しているのとは正反対に、達夫の方は悠々自適に異世界ライフを満喫していた。

彼がこの一カ月間何をしていたのかと言えば、それは、ユーフォリア——いや、有の事を観察する事だった。

元々、男だった時の有に興味が無かった達夫は、彼女がどんな性格でどんな考え方をするのかを全く知らない。

だから、自分のスキルがどれだけ影響を及ぼしているのか、それを踏まえて有と言う人間は、何を受け入れて、何を拒絶するのかを、じっくりと観察していたのである。

つまり、有の攻略方法を考えていた訳だ。

そして有にとっては最悪な事に、その作業は殆ど終わってしまった。
いた。

下衆で下品な達夫に、自分の操作説明書が渡ってしまったのである。

まず彼女は、とても優しかった。

達夫が悪趣味な冗談で、「ゆゝたんはとっても強いんだから、お金持ちから、バレない様に大金を奪っちゃえば」なんて言った時は、「冗談でも、そんな事言っちゃダメだよ、達夫」と、真っ直ぐな瞳で諭してきたくらいである——狂おしい程に好きにされている達夫に對して、だ！

だから、彼女は誰かの為に正しい事を出来る。そんな強さを持っていた。

——しかしそれが自分の事、となると途端に駄目になるのが有の特徴だった。

何かしらの被害に遭うのが自分だけ、となると、誰かを守ろうとす

る時の勇気を一%も發揮出来ずに、押しに弱く氣弱になつてしまふ。それが、幼い頃からとてもとても大好きで、命を懸けてでも役に立ちたいと強い恋心（偽物）を抱いている達夫相手となるとなおのこと顯著で、有は彼の要望をほとんど断る事は出来なかった。

その確認のために達夫は色々と要求をしてみた。

例えばそれは、紐として達夫を養う事であつたし、『ユーフォリア』として振舞う事であつたし、ひとつ屋根の下、同じ部屋の同じベッドで過ごす事であつた。

オマケに事あるごとに、有の体を嫌らしく触れたりもしてみた。

その結果、物によつては多少の難色は示したものの、しかし有は最終的にはその要求・行為を受け入れた。

こうなつてくると笑いが止まらないのが達夫だった。

有が生活費を稼いで来てくれる以上、冗談で言つたように態々他者に危害を加える氣は達夫には無かつたし。

その女性に対する下卑た欲望も、そもそもそれを一番向きたい好み

の存在が女体化した有なのだ。

彼女が居る以上、他の女など目にも入らない。

よって誰かの為に絞りだされる、有の勇氣や優しさなど日の目を見る事も無く、達夫にとって彼女は、鴨が葱と土鍋を背負って来た様な、要求フリーパスな恋堕ちラブラブオマンコ奴隷でしかなかった。

最早、準備も我慢もお仕舞。

有をゲームのユーフォリアに、いいや自分の理想のドスケベ嫁に変えてしまおうとする、達夫の身勝手に下衆な欲望が遂に本格的に牙をむき始めた。

「そろそろ。今日は、俺からゆーたんに贈り物があるんだあ」

「……えっ!？」

人権侵害を気持ちの悪い褒め殺しで押し切られた後、ユーフォリア

は全く予期していなかった達夫の言葉に驚きを覚えていた。

「いやあ、この一カ月間さあ、魔物と戦って生活費を稼ぐのを全部ゆーたんに任せちゃってたでしょ？」

「それは、ボクに偶々『戦乙女』のスキルがあったからだよ」

実際、その事に関して、ユーフォリアは一切の隔意を抱いてはいなかった。

異世界の魔物は強く、そして凶暴で、心意気だけでどうにかなる様な相手では無い。

だから偶々、戦える力を持った自分が矢面に立つのはユーフォリアとしては当然の事で、もしも達夫の『愛の矢』スキルの影響下に墜ちていなくても同様の行動をしただろう。

……まあそれと、稼いだお金を我が物顔で持っていかれる事に対する憤りは別の問題なのだが、そこは恋する乙女補正で無かったことにされていた。

「まあ、おっそろしいモンスターと戦える気は一切しないからあ、戦

闘はこれからもゆーたんに任せる形にあるけどねえ。でも、俺なりに何か力に成れないかと、ずっ〜と考えてたんだあ」

「そんな風に、思ってくれてたんだ」

「うんうん。そこで考えた結果、ゆーたんと同じくスキルの力を活かそうと思ったんだよ！」

「スキルの力を？」

「俺のスキルだけとお、どうやらモノ作りに適性があるらしいんだあ」
「そう、だったんだ。それで、贈り物を？」

「そーそー。まずは手始めに服を作ってみたんだ！ゆーたん、今はサイズの合わない学生服や、適当に買った服を着てるでしょお？激しい戦闘とかしてるんだから、服には気を遣った方が良い！って思ってたねえ」

「……達夫」

（そんな事を考えていてくれてたんだ……！）

達夫の言葉に有は深い感動を覚えた。

同時に、達夫は紐になつてゐる事を特に気にしていないとばかり思つてゐた自身の考えを強く恥じる。

………実際、罪悪感など覚えてゐなかつたので、そんな必要はないのだが。

「ありがとう……！」

「良いつて、良いつてえ。俺の方こそ一杯お世話になつてゐるからさあ。さ、これ。感謝の気持ち。受け取つてよ」

「うんっ！嬉しいっ……！」

——最愛の人からの贈り物に途轍もなく感動しているユーフォリアだが、彼女は知らなかつた。

確かに、達夫のスキル『愛の神の加護（劣化版）』は道具の作成能力に優れているが、道具は道具でも、エッチな道具——即ち淫具だという事を。

「……………」

「あれ？どつたの、ゆーたん。固まっちゃつて」

数秒前まで、感涙すらしそうな程の感激に身を震わせていたユーフォリアだったが、今の彼女は別の理由で体を震わせていた。

それは――羞恥だった。

「ここここここここここここここここここ、」

「鶏の真似かなあ？」

余りの衝撃に言語機能がバグったユーフォリアの視線が向かう先は、たった今、達夫から手渡された彼がユーフォリアの為に作ったと言う衣服だった。

「こんなの着れないよ！」

「なんでえ？ ゆーたん、それに言葉遣い。演技を忘れてるよお」

「そんな事、言ってる場合じゃないよ！ だって、これ。こんなの……」
ユーフォリアが手渡された服。

……いや、それはもう、服と呼ぶのが烏滸がましい程の、唯のエッチな布切れだった。

余りに露出が多く、扇情的で、マトモな感覚を持っている人間が着

る衣服では到底無い。

と言うか、ユーフォリアはこの布切れに、何か嫌なデジャヴを感じていた。

「えー。折角、ゲームのユーフォリアさんの衣装を再現してみたのに」

「そうだ、これ……！」

そうだった。とユーフォリアは、自分が感じたデジャヴの答えを知った。

この異世界に来てから、達夫のスマホで見せられたゲームキャラクターの『ユーフォリア』の服装。

今しがた手渡された布切れは、それにそっくりであった。

「エッチなゲームのキャラクターの服なんて、実際には着れないよ……！」

スマホの女キャラ。それも成人向けの物の衣服なんて、如何に男のチンポを疼かせて、金を落とさせるかだけを追求した代物だ。

実用性など到底皆無で、実際に作れば痴女専門服になるのが道理だった。

「えー。絶対似合うのにいー」

「とにかく、ボクは絶対に着ないから……!」

いくら何でも、これを着て生活しろと言うのは聞けない要求だった。達夫の事が大好きなユーフォリアだったが、羞恥心まで捨てた訳では無いのである。

しかしそんなユーフォリアに対して、達夫が取った対応は極めて悪辣で、意地が悪かった。

「ハアアアア……!こっちのゆーたん——ううん、有くんは、俺の感謝の気持ちを受け取ってくれないんだね。やっぱり信頼出来るのは君だけだね、ゆーたん」

「———なっ!？」

達夫は、電池切れで映らなくなったスマホの画面に、わざとらしく話しかける。

その様子を見たユーフォリアは、今まで生きてきて感じた事の無い感情を覚えた。

それは女の嫉妬。

大好きで、大好きで、大好きで。彼の為ならば、命だって捨てられる程に愛している男の子に、よりもよってゲームのキャラクターを引き合いに出されて失望される。

その憤りの激しさ。情念の深さと来たら！

（い、嫌だ。ゲームのキャラクターなんかには、達夫を取られたくない……！）

元男な上に、温和で気が弱く、今まで自分の事で我を通した経験が殆ど無いユーフォリアは、内側からドロドロと湧き出してくるこの暗い感情を上手くコントロールすることが出来なかった。

だから彼女は、地獄へ続く崖に身を投げるような軽率な行動をとってしまった。

「――着るっ」

「ええ？何か言った？」

「だから！その服を着るっていったの!!」

今まで出したことの無いヒステリー染みた声が飛び出す。

「その代わり――」

「その代わり？」

「二度とボクの前で、ゲームの方の『ユーフォリア』の話をしないで
っ――!!」

自分だ。自分が一番に彼を愛している。

彼にゆーたんと呼ばれて微笑んで貰えるのは自分なのだ。

間違っても、ゲームのキャラクターなんかじゃないっ！

そんな思いがユーフォリアの胸の中に溢れ出した。

その様子はどう見ても嫉妬に駆られる女のそれで、他ならぬユーフォリア自身が、自分の取った行動に驚いてしまう程だった。

けれども、止められない。感情的に動いてしまう。

「うーん。分かったよお。じゃあその代わりにコ・レっ！――着てく

れるんだよねえ？」

「……………うん」

自分の体を舐めまわす様な、達夫の粘つく視線を感じながらも、ユーフォリアは確かに首をこくんと縦に振った。……振ってしまったのだ。

「ふひひっ。ふひひひひひひっ——!!」

「……………う。……………うあつ。ううっ……………!」

(こんなの、絶対駄目なのにつ……………)

馬鹿な事をしている。馬鹿な事をしている。馬鹿な事をしてしまっている！

ユーフォリアはいつそ死んでしまいたい程の羞恥と、自らを責め立てる想いに苛まれていた。

今の彼女は、植え付けられた莫大な愛情とそれによって発生した嫉妬により、達夫が用意した服を着てしまっている状況だった。

——その服の全体的な印象を一言で表すのなら『踊り子』だった。……正し、枕詞に『極めて性的な』が付くが。

頭にかぶせられた、葉っぱを模した意匠を施した金色のサークレットと、高級なサンダル染みた素足が見える靴は共に素晴らしく、ユーフォリアの魅力をしっかりと引き立てている。

さて、マトモな部分は以上である。後の、どう考えても痴女が着る服以外の何物でも無い他の部分のデザインを説明しよう。

まずは上半身。

良く出来た首飾りから、白く細長い長方形の布が本、両胸の中心のライン——丁度乳首のラインを辛うじて隠せる程度に肌に乗っかっている。

……追加の説明は無いし、描写が足りていない訳でも無い。本当にそれだけなのだ。

次に下半身。

腰に紐と鎖が巻かれており、そこから股を何とか隠せる程度の細長い白い布が垂れ下がっている――以上だ。

こちらもうやはり過不足なく描写してこれだった。

つまり纏めれば、ユーフォリアの体を隠している衣服は、頼りないωつの暖簾的な布だけと言う事になる。

しかも、かなり薄い布地を使っているのか、よく見ればその下の素肌が透けて見えてしまっていた。

これでは最早衣服としての体裁などまるでなしてはいないだろう。一応、正確に言えば両腕の部分は同じ布地で作られた袖で覆われていたが、頭隠して尻隠さずならぬ、腕隠して体隠さずでは全く意味がなく、逆にエロさを引き立てているだけだった。



「いやあ、流石、ゆうたん！良く、似合ってるよお」

「……あ、あんまり、みないでっ……！」

（み、見られてるっ……。ボクの恥ずかしい所、達夫に全部っ……！）

あまりの羞恥に腕で自分の体を隠しながら、達夫に懇願するユーフオリアだったが、勿論その必死の願いは聞き届けられなかった。

達夫は、ユーフオリアの体に馴れ馴れしく触れて、その手を降ろさせて彼女の体をねっとり鑑賞していた。

そしてユーフオリアに対して、更に絶望的な言葉を投げかける。

「ぐふっ……！そんなに恥ずかしがっていてもしょうがないよお、ゆうたん。何せ、同じ服を何個も用意しているから、ゆうたんの正装はこれからずっとそれなんだからさあ！うーん、そうだなあ、慣れるために今から一緒にお散歩でもしよつかあ！」

「……え。さ、散歩……？」

（こんな格好で、外に――）

「む、無理っ。絶対、無理だよお……！そんなのっ……！」

ユーフォリアは堪らず涙目になって首を振った。

しかしそんな彼女に対して、達夫はまるで容赦がなかった。

上機嫌だった表情を、急に無表情に変えて、態とらしくスマホを持ち出した。

「ふーん、約束破るんだ」

「っ……。ううっ……」

羞恥か、愛情か。

人としての尊厳を守り抜くか、恋する人に気に入って貰うべく、恥を捨てて芸を行うかの二択をユーフォリアは強いられていた。

そして彼女が選択した答えは――

「わ、わかった……」

「え？何だって？」

「お散歩、行くから……。これから、この服で生活するから……」
だから嫌わないで。ボクの事だけを見て下さい。

そんな、健気な思いでユーフォリアは言葉を絞り出した。

「流石、ゆーたん！ふひひっ、愛してるよお！」

「あうっ……」

（だ、駄目だ。ぼ、ボクっ……）

こんなに恥ずかしくて、今にも死んでしまいそうなのに、しかしそれ以上に達夫の軽い愛の言葉に舞い上がってしまったている自分を発見して、ユーフォリアはどうしようもなく心の中で呟いた。

「おう。大注目だねえ、ゆーたん」

「やあっ……」

（視線が絡みついて……！）

どう取り繕っても痴女でしか無い格好で、ユーフォリアは達夫と一緒に散歩を始めていた。

確かにこの世界はファンタジー世界で、元いた世界より過激な服装をしている者も多いが、流石にこれほどの痴女服を着ている者は居ない。

男たちからのネバネバとした欲望の視線。女達からの冷たい侮蔑の視線。

様々な視線が、体中を這い回っているようで、ユーフォリアは気が気で無かった。

「お、風だ」

「——っ！」

「おう流石あ！」

「ふーっ、ふーっ」

（ああ……。スキルをこんな馬鹿なことに使って……）

突如として吹いた強風を、ユーフォリアは神業的な姿勢制御で受け流す。

それによって大した支えもなく頼りない暖簾風の布が捲られることなく、ユーフォリアの恥部を隠し抜いた。

こんな事に『戦乙女』のスキルで上昇した身体能力を使わされて、恥ずかしいやら情けないやらで、ユーフォリアの心は激しく沈み込ん

だ。

しかもここまでやっても、そもそも乳首は透けて見えているし、お尻なんかは丸見えである。

どうやっても見世物にしなければならない、だからユーフォリアは――

「た、達夫っ……！」

「おほっ……！ゆーたんったら大胆だなあ」

――ラブラブな恋人の様に、或いは媚を売るメスの様に、達夫に体を絡みつかせる。

それがユーフォリアのたった選択だった。

普通に体を隠そうとした所で妨害が入るのは目に見えている中、ユーフォリアが咄嗟に思いついた手段はこれだけだったのだ。

どうかボクを守って……とばかりに、絡みつく甘く柔らかい肉体に、達夫はすっかり気分を良くしてユーフォリアの体を自分の方に更に引き寄せた。

だから一応、ユーフォリアの目論見は成功したと言えるのだが、し

かしその行動はまた別の苦難を呼び寄せる事となった。

「うゝん。そらよつと！」

「……ひうつ、た、達夫……!?あのっ……」

すっかり調子に乗った達夫の手が、ユーフォリアのお尻を鷺掴みにして揉みしだき始めたのである。

堪らず声を上げるユーフォリアだったが、達夫はどこ吹く風な様子だった。

「体を隠したいんでしょお？手伝ってあげるよお」

「あうつ……。ひうつ……。つう……」

（達夫以外に見られる位ならっ……）

迷いに迷ったユーフォリアだったが、最後には顔を真っ赤に染めながらもこくん、と頷いた。

それによって、許しを得たとばかりに達夫の手によってモミモミ♥
モミモミ♥とお尻を揉まれて続けてしまうユーフォリアだった。

ああ、しかし体を極めて寄せ合って、お尻まで揉まれる。これでは

まるで――

「ぐふっ。皆、俺たちの事をラブラブなカップルだと思ってるねえ。嫉妬の視線が気持ちいいよお」

「ふえっ……!!」

――どう見ても、周囲に自分たちの仲を見せつけているバカカップルのそれだった。

周りの男達の、どうしてあれ程の美少女が、あんな男に……!!と言う視線が突き刺さる。

普通の女子であれば、キモオタの達夫をそんな風な関係に見られるのは死んでも我慢ならない所だろう。

けれども、ユーフォリアの反応は違った。

「おっ、ゆうたん。もっと体を寄せちゃって、どーしたの?」

「な、何でも無い……♡」

（ああ、駄目だ。ボク……。こんな状況なのにつ……。!）

人として最大級の恥を晒している最中だというのに、ユーフォリア

の心はそんな小さな事で弾みだしてしまっていた。

それは、彼女の心がどうしようも無いほどに偽物の恋心に侵されてしまっている何よりの証拠だった。

——これから先、彼女に与えられる淫靡な試練は最早留まるところを知らない。

LEVEL3 性欲処理とスライムオナホ（ローション付き）

ジメジメとした薄暗い沼地。

どこか不安感を掻き立てるそこは、とある魔物の生息地であった。

それは、水が動いている様な半透明で青い、ゼリー状の生物。

名を——スライムと言った。

スライムと言えば、某国民的RPGが大衆のイメージを可愛くて弱い物に塗り替えてしまったが、此処に居るスライムはそれ以前のゲームなどで見られた、本当は怖いスライムの方であった。

液体と固体の中間の様な体は、生半可な物理攻撃を無効化する上、そもそもその流動性が高く、不規則で素早い動きはしっかりと捉えることが難しい。

オマケに、体に麻痺毒が仕込まれていると言うのだからその危険性が分かるというものだろう。

物理一辺倒でやって来た冒険者を阻む壁の様なもの、それがスライ

ムと言う魔物であつた。

——しかし、今回は相手が悪かつた。

『ホーリーレーザー』……!』

細長い神々しい光がレーザーの様にスライムの体を貫いた。

ぷるぷると身を震わせていたはずのスライムは、その動きをアッサリと停止させ、物言わぬゼリー状の物体に早変わりしてしまった。

「……うん。問題ないかな」

それを為したのは当然ながらユーフォリア。

先日、達夫に実質的に強要された恥ずかしい衣装を身に着けた彼女は、この沼地にスライムを狩りにやって来ているのであつた。

「えい……。えいっ……」


どこか気が抜ける平坦な声を出すユーフォリアだったが、その瞬間に起こった出来事は、声の調子とは正反対に凄まじい物だった。

先程、スライム倒した光のレーザー。それが幾本も幾本も発射されて、別のスライムたちを串刺しにし始めたのである。

危険な筈の沼地が、あっという間にスライムゼリーの生産工場へと塗り替えられる。

嗚呼、このまま善良（という訳では別に無い）スライム達は為す術もなく虐殺されてしまうのだろうか……!!

「あ」

沼の水がこぼこぼと泡だった後、ザバァ！と大きな水飛沫が上がる。そこから現れたのは人の身長以上——はあろうかと言う巨大なスライム。

それは、スライムの上位種であるヒュージスライムであった。

同胞たちを殺された怒りか、単に我が身が可愛いだけかは定かではないが、ヒュージスライムは、その巨体をぷるぷると激しく振動させて威嚇の体勢をとった。

言葉だけ聞けば可愛らしく感じるかもしれないが、その巨体を目にすればそんな感想は出てこないだろう。

例え、凶暴な熊が相手であろうとも丸呑みにしてしまう程の威圧感

がヒュージスライムからは溢れていたが……

「ていつ」

またしても無造作に放たれた白光が、ヒュージスライムを一瞬で貫いた。

哀れヒュージスライムは、巨大なスライムゼリーへと瞬秒クツキングをされてしまったのである。

全く相手になつていなかったし、もはや唯のスライムと同じく雑に処理をされていた。

そもそもユーフォリアはやろうと思えば、物理攻撃ですらスライムを楽々と倒せる程の力を持っているのだ。

これで魔法まで使えば、弱い者虐めになるのは当然の事だった。

「――ふう。これで集まった、かな？」

スライムたちの死骸をアイテムボックスに入れながら、ユーフォリアが一息を吐いた。

一体、彼女は何故、こんな明らかに適正レベルより下の場所で、狩

りをしているのか。

その答えを語るには、時間を少し巻き戻す必要がある。

それは、やはり彼女が達夫と話している時の事だった――

「な、な、な、な、な、な――!？」

〜人が一緒に暮らす宿屋の部屋の中、ユーフォリアが壊れたラジオと化していた。

先日から、痴女専用以外の何物でもない、成人向けソシヤゲの女キヤラの恰好をさせられていると言う目に遭っているユーフォリア。

もうこれ以上に恥ずかしい事なんてないだろう、なんて思っていた彼女の甘い考えを、達夫は悪い意味で容易く飛び越えて来た。

「い、今。な、な、な、何て言ったの、た、達夫……!？」

「あれ、聞こえなかった？ ゆーたんに性処理を頼みたいなあって言っ

たんだよ」

「……はひっ!？」

(き、聞き間違いじゃ無かった……!)

達夫から頼みがあるんだけど、と話を持ち掛けられ、どうしたの？と穏やかに微笑みながら耳を傾けた直後に放り投げられた、とんでもない問題発言。

いくら何でも聞き間違いだろう、と言うユーフォリアの淡い望みは、達夫の極めて軽い調子の発言で、あっという間にぶち壊された。

「せ、せーよくしよりって……!」

もはや顔面中の血管全てが破裂して死んでしまうのではないかと思わんばかりに顔を紅くして慌てふためくユーフォリアに対し、達夫はさも自分は正しい事を言っているんだけど何か？的な凶々しい雰囲気を出しながらしゃべり始めた。

「いやあ、ゆうたんと俺、ずっと同じ部屋で寝てるでしょお？もうチンポがギンギンに勃っちゃって、勃っちゃって。一人で処理も出来な

いから、ゆーたんに処理して欲しいんだよお」

「あの、でも、それは、だって……！」

一緒の部屋で寝泊まりしているのは、そちらの提案だろう、とか。生活費を稼ぎに行っている間は「一人なんだから幾らでも処理を出来る筈だ、とか。

そもそも、仮に言っている事が正しかったとしても、それは自分が性処理を行う理由にはならないだろう、とか。

反論の言葉は、それこそ星の数ほどあるだろう。

しかしながら、ユーフォリアはその中の「一つすらマトモに口に出すことが出来なかった。

（た、達夫が、ボクと「」な事をしたいって……！う、嬉し——っ！だ、駄目だよ、そんな風に思っちゃ……！）

非常識以外の何物でもない達夫の発言に対し、しかしユーフォリアの心の中に溢れ出した感情は、羞恥と——喜びだった。

傍目から見れば気色の悪いキモオタが好みの美少女に対し、気色の

悪い迫り方をしている状況で、そもそもそれが真実だ。

けれども、この世でただ一人。肝心要のユーフォリアにだけは、全く意味が異なる状況なのだ。

彼女にとって達夫は、好きで、好きで、世界で一番に愛している相手。

そしてそんな相手から熱烈に自分を求められているのだ。

そんなの舞い上がってしまったても仕方が無いだろう。寧ろ、諸手を上げて飛びつかないだけ、貞淑で慎ましいとすら言えるかもしれない。

「そ、そんなの出来ないっ……！」

「えゝ、なんでえゝ？」

「だ、だって……！ボク、男の子だからっ……！」

それが思わず反射的に頷いてしまいそうな心を辛うじて押し留めた、最後の鎖だった。

一度了承したが最後、箍が外れてどこまでも墜ちて行ってしまう様な不安感をユーフォリアは覚えていた。

「でもお、今のゆーたんは女の子じゃん」

「確かに体はそうだけど、心は男の子のままだから……!」

それは確かにそうだが、ユーフォリアは達夫にガチ恋させられてしまっている。

彼女の性自認は、ぐちゃぐちゃの滅茶苦茶にされている真っ最中で、だからその抵抗は、押せば簡単にヤレてしまいそうな程に、儼く弱弱い物だった。

「ふーん。じゃあいいや」

「……え」

「無理にして貰う気はないから、嫌ならしいがないね」

「う、うん。あ、ありがとう……?」

自分の身を切る様な思いで、必死に断りの言葉を入れたユーフォリアに対して、意外にも達夫はアッサリと了承の言葉を入れた。

それにホッとした様な、残念な様な何とも言い難い気分となったユーフォリアだったが、話はそこで終わりではなかった。

「それじゃあ、はい」

「……………」

達夫が、ほら！とばかりにユーフォリアに向かって何かを受け取るうとする形で手を差し出したのである。

勿論、ユーフォリアは、達夫が一体何を求めているのか分からずに、頭を混乱させた。

「えっと……………」

「ゆーたんの言うことは分かったから、お金を頂戴」

「それは構わないけど、何に使うの？」

元より、生活費から何から全てユーフォリアが負担している以上、お金を渡すことなど今さらで構わないが、しかし話の流れが見えない。

どうしていきなりそんな事を言い出したのか、と訝しむユーフォリアに対して、達夫が衝撃の言葉を放つ。

「ゆーたんがやらせてくれないから、代わりに娼館に言って性欲を分散してくるよ、だから、お・か・ね！」

「……………え」

性欲を発散したいから娼館に行く。

その為に、他者から金を無心するというゴミポイントに目を瞑れば、
解決策としては、まあ比較的真っ当な部類だろう。

……………しかしながら、ユーフォリアにとってその案は極めて衝撃的だった。

「あれえ。ゆうたん。イキナリ顔を真っ青にしちゃってどうしたの」

「……………う」

（達夫が、娼館に……………？他の女の子とエッチな事を……………？——い、嫌だ。そんなの嫌だっ！）

その様子を想像しただけで、ユーフォリアの胸中はキリキリと壊れてしまいそうな程に軋み始めた。

例えば、達夫に誰か好きな女の子が出来て、その子と結ばれるとしよう。

それならユーフォリアは祝福出来るだろう。

もちろん悲しいし、泣いてしまうかも知れないが、それでも達夫が選んだ相手なら仕方がないのだと、自分に言い聞かせて見せる。

けれども、それと今回の話は全く別の事だと、ユーフォリアは強く思う。

だって彼が求めてくれているのは自分なのだ。

愛して貰えそうだったのは自分なのだ――!!

それを断ってしまった所為で、彼が他の誰とも知らない女と深い関係になる？

そんなの考えただけで死にそうになる!!!

ユーフォリアの頭の中は、こんな風な考えで一杯になってしまっていた。

今も着ている恥ずかしい衣服をまんまと着させられた時と同じ様に、愛情と嫉妬で感情が滅茶苦茶になってしまい、それが体を突き動かす強い衝動となってしまう。

だから彼女はまたしても、自分自身の背を地獄に通じる崖の下に突

き落とすかのような選択をしてしまった。

「だ、駄目っ……！そんなの駄目っ!!」

「えー。ゆーたん、なんでえ？」

「だ、だって……。お金が、勿体ないから……」

「ゆーたんの稼ぎなら、そのくらい余裕でしょお？それにい、それなら俺のこの、高まりに高まった性欲はどう処理すれば良いんだよお」

「……………る、から」

「え、何？聞こえない」

「ぼ、ボクが、処理、するから……!」

達夫がニチャア、と気色の悪い笑みを顔に浮かべた。

「もっとハッキリと言ってよ、ゆーたんが、誰の！何を！処理するの
お？」

「ううっ……。ボクが達夫の、せ、せーよくを処理するからっ……」

「ええっ？良いんだよお、別に。嫌々やってくれなくても」

「だ、大丈夫、だからっ……!」

「ふーん。それなら良いけどさ……」

一世一代の決心のつもりで了承したユーフォリアに対して、達夫の返事はどこか軽い物だった。

まるで、この提案を了承させるのは確定事項で、もっとさせたい事は別にあるかのような――

「それじゃあ、さ。スライムゼリーを取って来てよ、ゆーたん」

「えっ？ どうして……？」

いきなり明後日の方向に飛び跳ねた話に、ユーフォリアの目が驚きで丸くなる。

そんな彼女に対し、達夫がいいや、話は変わっていないんだよ、とばかりに、自分の言葉の意図を説明しだした。

「いや、俺としてもゆーたんの何とも言い難い気持ちは分かっているつもりだからさあ。何もイキナリ本番をさせてくれ、なんて言う気は無いんだよお。取り合えずエッチなアイテム越しにやってくれれば、それで良いからさ」

「エッチなアイテム……？」

「あれ？もう忘れちゃった？この前、ゆーたんだけにお金を稼いでもらっているのは悪いから、淫具を作って売ってみる、って話をしただろお？けれど、一度も試さないで売りには出せないでしょ？だから、ゆーたんで試させてよお」

「そういえば、そんな事……」

ユーフォリアとしては、自分にエッチな服装を着させてる方便だとばかり思っていたが、どうやら達夫的には本気の話であつたらしい。「ゆーたんの超絶強いスキルだったら、ちよつとぐらい危ない物でも安全だし、それに実験に付き合うだけって考えれば気が楽になるでしよお？だから、俺の事を助けると思って、お願い、ね？」

「……………」

正直な所、悪い予感はしていた。

達夫の本心が、言葉通りの物で無いことなど分かつて当然だ。
けれども――

「う、ん。分かった。折角、達夫が考えてくれた事だし、ボクで試してみて」

「ひひっ。そう言ってくれると思ってたよお！」

淫具の実験
そのために話に乗ったことにすれば、自分が抱いている気持ちを達夫に知られずに済む、と。ユーフォリアはまたしても地獄への道を歩進んでしまったのだ。

その様子は、達夫は厭らし気に笑いながら見ていた。

「くひっ……！おまたせ、ゆうたん！完成したよおっ！！」

「う、うん。おめで、とう……」

夜。宿屋の一室。

ユーフォリアが沢山持って帰って来たスライムゼリーを使って淫具を作ったらしい達夫が意気揚々としていた。

対するユーフォリアは、必死に澄ました顔をしているから分かり難い物の、よく見ると、これから自分が一体どのような目に遭ってしまうのか、とビクビクとしているのが分かる。

……ただ、その瞳の中にどことなく期待している様な色が混じっているのが、偽りの恋心を植え付けられた者の悲哀だろう。

「ぐふふつ、今回作ったのはこれと、これっ！」

「えっと……。透明なスポンジ？と水筒？」

達夫が取りだしたのはスライムゼリーで出来た透き通った丸い筒状のスポンジの様な物に、中からとぷつ……。とぷつ……。と思い水音が鳴っている水筒だった。

「まあ、水筒の方は中に入っている液体の方が重要だから今は置いておくとして、こっちの方を紹介してあげるよお！独り身で寂しい男たちに必見のアイテム！各々のチンポの形にフィットして柔らかさと締め付けの両方の感覚を一気に与えてくれる魅惑のオナホ、スライムちゃんEX!!」

「これが、オナホ……」

まるで「く通販の商品紹介の様な達夫の言葉に、ユーフォリアは意外にも興味深そうに、耳を傾けていた。

肉体的にはもう全く分からないし、精神的にも偽りの恋心を付与されている所為で色々おかしくなっているとはいえ、彼女も元は男子高校生。

そう言ったエッチな道具に興味があるかどうか、と言われれば、正直、割とあった。

「それじゃあ、ゆうたん。これを使って俺のチンポを扱いて見てよ。直接触るよりかは気が楽でしょお？あ、後。音が出ても良い様に魔法でなんとかしといてよ」

「……う、うん。――【サイレンス】」

そんな一見、相手の気持ちを考えていますよ的な、しかし冷静になってみればただ自分勝手なだけの台詞を述べながら、達夫はベッドの

上に座り、自らの下半身を露出させた。

ガリガリの体からは想像も出来ない女殺しの巨大チンポが、遂にユーフォリアに直接的な奉仕をさせられると言う薄汚い期待感で、ガチガチに反り返ってこんにちは、をする。

「いやあ……！スキルの影響か、大分おつきく、それに暴れん坊になっちゃってねえ。もう、抑えておくのが大変、大変」

「う、あっ……」

（こ、これが達夫のおちんちん……。ぼ、ボクより、ずっと大きい……）

その時、ユーフォリアが感じた思いは非常に言語化し難い物だった。雄として目の前の相手に完敗していると言う敗北感。

雌として大好きな相手の秘部を見せられた事による高揚感。

そして元男として、そんな感情を覚えてはならない、と思う背徳感。卑怯な手段で付与された偽物の感情が混じっている所為で、精神を

あちらこちらから乱暴に引っ張られている様な物で、ユーフォリアは頭がくらくら、と何が何だか分からなくなってきた。

「それじゃあ早速、と言いたいところだけど……。その前に、ゆうたん。状態異常への耐性を落としてよ」

「……………」

ユーフォリアの疑問の声に、達夫はスライムオナホとは逆側の手に持った水筒を軽く揺らしながら答えた。

「こっちの方は、ちよつとした効果を持った液体なんだけどお。ほら、ゆうたんのスキルは強すぎて、状態異常とかそのままだと全部弾いちゃうでしょ？それじゃあ、実験にならないから、一旦耐性を落としてよ」

「う、うん……。――さ、下げたよ？」

（協力するって言っちゃったし、仕方が無いよね……。?）

ここで、ユーフォリアの気の弱い所が出てしまう。

危ない、とは思いつつも、一度承諾してしまった以上、断る事が出

来なかった。

「くふっ。ありがと。よし、じゃあこれでっ、とお！」

「ひゃんっ……!?冷たっ……!?」

状態異常耐性を下げた途端、待ってました！とばかりに達夫が水筒の中に入っていた液体を、ユーフォリアの体に振りかけた。

それはドロドロ、と粘性をもったローションの様な液体だった。

「な、何、これっ……？」

「良いから、良いから。直に分かるよ、ふひっ」

「直に分かるって……。うう……。ドロドロして気持ち悪いよお……」

正体不明のローションを割りと大量に掛けられてユーフォリアが泣き言を漏らす。

唯一の救いは衣服にはそこまで影響が無かったこと——いや、それは、派手に液体を掛けられてもあまり影響が出ないほどに、露出の激しい服装をさせられていると言う事なので、何の救いでも無いかも知れない。

「そんな事より、早く性処理をしてよ。もう待ちきれないよ、ほらっ！」
「……う。わ、分かったから、おちんちんをそんなにビタンビタンさせないでよお……」

「まずはオカズになってよ。ねえ！ほらっ！早くうー！」

「そ、そんなに急かさないで。………はいっ」

「くほっ……！やっぱりその服、直ぐに脱げて最高だよねえ」

「その所為で苦勞してるのに……」

（うう……。達夫にボクのエッチな所見られちゃってる……）

溢れ出す性欲に突き動かされた達夫の催促の声に押され、ユーフォリアは自らの手で、自身の衣服の上半身と下半身の暖簾の様な布を捲り上げた。

たったそれだけで、ユーフォリアの恥ずかしい部分は、全て達夫に對して曝け出されてしまう。

綺麗な桜色の乳首に、男の侵入を一度も許していないピツチリと閉じたオマンコ。

本来ならば絶対に見ることのできない、超絶美少女のマル秘映像に、達夫は思わず感嘆の声を漏らした。

「さ、次はオナホを手に持ってっ……！ゆーたんの手でチンポに装着してよ！」

「う、うん……。あっ……。こんな感触なんだ……。それじゃあ、こ
う、かな……。？」

「くほくくくく！」

「ひう……。!?だ、大丈夫……。？」

「だいじょぶ、だいじょぶ！流石は魔物の素材で作ったオナホだね、チンポにピッチにフィットしてちょく気持ちいいよお」

「そ、そうなんだ。良かった、ね？そ、それじゃあ……」

（ああ……。ボク、男の子なのに、男の——達夫のおちんちんを握っ
ちやってる……。♡）

そして遂に、ユーフォリアがおずおずとスライムオナホ越しに、達夫のチンポを扱き始めた。

それは、最初はビクビクとゆっくりに、次第に少しずつ早くなっていく。

新雪の如き白く柔らかく華奢な手が、薄汚いデカチンを握りしめる光景は、言いようもなくインモラルだった。

「嗚呼っ……！スっげっ……！ゆーたん、さいこおー！」

「き、気持ち良い……？」

「うん、ちょー気持ちいいよお！あ……。射るっ！あ、まだ全然イけるから手は止めないでね！」

「うん、分かった。強かったり、弱かったりしたら遠慮せずに言っ
ね」

（良かった……。達夫が喜んでくれる……。！）

気色の悪いキモオタが、気持ちの悪い声を出しながら気持ちの悪い姿を見せられているという地獄の様な状況。

普通の人間が見れば、思わず朝食をリバーズし兼ねない程に不快な映像だが、残念ながら夥しい程の量の恋心を卑劣に植え付けられたユ

ーフォリアに取っただけは、大好きな相手が二重の意味で自分の手によって喜んでくれている場面だ。

ユーフォリアは、自らの葛藤の事は一先ず忘れ、とてもとても幸せそうに顔を綻ばせた。

故に、その内実はともかく、表面的には微笑ましく終わるかと思われたが………時間が経つにつれ、ちよつとした異変が起こり始めた。

「はあっ………！♥♥んんっ………！♥♥ひんっ………！♥♥」

「ぐふっ。ぐふふふっ………！どーしたのかな、ゆうたん。息が荒いし、手の動きが疎かになりだしてるよお？」

「ご、ごめっ♥♥ごめんねっ！ひゃうんっ………♥♥な、なんかっ♥♥体の様子がっ♥♥ひんっ♥♥♥♥」

（全身がピリピリするっ………♥♥頭が、ぼーっとしだしてっ♥♥♥♥♥♥）

性的な刺激を受けている側の達夫では無く、ユーフォリアの方が、異様に快楽を感じ始めたのである。

彼女の顔色は羞恥によつてとても紅く染まり、その口からはなんとか抑えようとはしているものの、抑えきれなかった嬌声が漏れ出し始めていた。

最初は好きな相手とエッチな行為をしている事による高揚感だと思っていた。

と言うより、それはそれで確かだったので、その所為で気が付くのが遅れてしまったのだ。

ユーフォリアの体には今、明らかに異常が発生し始めていた。

「もー。ゆーたんったら、気が付くのが遅すぎだよ。効果が出なかったのか、って焦ったじゃん！」

「――え？たつ、お？」

「少し考えれば分かるでしょ？さっきの液体の効果だよお」

「あ、あれが、原因？」

自分の身に起こった異常に翻弄されているユーフォリアに対し、達夫はアツサリと事も無げにそのネタ晴らしを行った。

当然と言えば当然の話だが、先ほど掛けられた粘性を持った謎の液体がユーフォリアの異変の原因であるらしい。

「スライムって獲物を捕らえる為に、その体に麻痺毒を持ってるでしょ？スライムオナホの方は当然無毒化してあるんだけど、さっきゆーたんの体に掛けた液体は、その毒を変異させたものなんだ。性的感覚の鋭敏化と断続的な快樂の発生——ま、簡単に言えば媚薬かな」

「び、媚薬……♡♡♡」

今日日、エロ漫画か何かの中でしか聞かない筈の物が、謎の液体の正体だったらしい。

外れの☝スキルとは言え、流石は人智の及ばぬ邪神から授かった技能。

その効果は元の世界に存在していた、媚薬とは名ばかりのちよつとした興奮剤程度の物では済んではおらず、乱雑に胸を揉まれれば普通に痛がるだけだった至って正常なユーフォリアの体の感度が大幅に引きずり出されていた。

その証拠に――

「例えばこうするとお……」

「ひゃんっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡た、達夫っ……!」

達夫の指が、不意打ち気味にユーフォリアの体に触れる。

それは別に、敏感な部分に触れた訳でも無かったというのに、ユーフォリアの口からは可愛らしく、そして淫靡な声が漏れ出した。

男の指で少し触られただけで艶声を漏らす。それこそまるでエロ漫画のヒロインの様な感度に、今のユーフォリアはなってしまった。

「ごめん、ごめん。悪かったってえ、くふっ!これ以上悪戯はしないから、気にせずに手コキを続けてよ」

「き、気にせずって♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「実験。協力してくれるんでしょ?」

「ううっ……♡♡♡♡♡」

ここまで来て断ると言う選択肢を取れる勇氣は、氣弱なユーフォリアには無かった。

彼女は今までに感じたことのない快感に翻弄されながらも、再び健気に達夫のチンポを擦り始める。

「ひんっっ♥♥♥ふーっ♥♥♥あっ♥♥♥へうっ♥♥♥」

「あゝ。ゆーたんのASMR手コキサイコ〜〜〜」

「へ、変な事言わないでよお♥♥♥♥♥」

恥も外聞も投げ捨てて気色の悪い声を上げる達夫と違って、しっかりと羞恥心を持っているユーフォリアは必死に快楽を我慢しようとしているが、ままならない状況だった。

まるで空気に全身を愛撫されているように、体全体がポカポカ♥♥♥、ピリピリ♥♥♥とエッチな感覚を脳味噌へと送信してくる。

そして遂に――



「ひっ♥♥♥あっ♥♥♥だめっ♥♥♥イっ♥♥♥♥♥」

プシュッ♥♥♥と勢いよくユーフォリアのオマンコから潮が噴き出した。

それを見た達夫がニヤアと意地の悪い笑みを顔に浮かべる。

「あれ？あれれれれ？？？ゆーたんもしかしてイっちゃった？男のチンポを擦ってただけで？？？？」

「ち、違っ♥♥♥そんなことっ♥♥♥」

「もー。嘘を吐かれたら実験にならないでしょ！それにい、俺の方は何度もイッてるんだけど、それを恥ずかしいって言うつもりなのか？」

お前は存在自体が恥ずかしいだろう、と言うのが普通の人間の意見だが、残念ながらガチ恋中のユーフォリアは、そう言われると弱い。だから彼女は、唯でさえ激しい羞恥に襲われている中、更にそれを口に出させさせられ始めた。

「うう……♥♥♥い、いきまし……た♥♥♥」

「え？何？声が小さくて聞こえない？もつと大きく、詳細に伝えてよ！」

「ううつつ……♡♡♡ぼ、ボクはっ、達夫のおちんちんを弄ってるだけでイッてしまいました♡♡♡」

「ぐふっ。ぐふふふっ……！良く言えました。うんうん。媚薬の効果はバツチリみたいだね」

ユーフォリアの顔は最早林檎の様に真っ赤だ。

しかしけれども達夫に自重の二文字はサッパリ見られなかった。

「さ、もつと続けてよ。まだまだビンビンだからさ。これまで溜めてきた精子を全部射^ださなきゃね」

「あんなに射^だしたのに♡♡♡まだ、こんなっ♡♡♡♡」

スキルの影響で半ば絶倫と化している達夫のチンポは未だにギンギンだった。

結局、この日。朝方になるまでユーフォリアが開放される事はなく、彼女は何度も愛する人の前でイキ顔を晒す羽目となったのである。

LEVEL4 キラービーの毒針と爆乳化注射

キラービー。

森林地帯を主な生息場所とする蜂型の魔物である。

姿形そのものはスズメバチに酷似しているが、圧倒されるのはその大きさだろう。

通常の個体で100前後、成熟した個体に至っては200を超すものすら現れる。

性質は極めて凶暴かつ攻撃的。

一度、巣の近く立ち入ったが最後、数百匹近い個体が一斉に襲いかかってくる。

腹部についた巨大な針は、単純に刺されただけで胴体に風穴を開けられてしまう程の物だが、更に強力な毒を内包しており、刺された周辺の箇所が大きく膨れ上がり激痛を発するようになってしまう。

人の居住域の近くに作られた巣に、運悪く立ち入ってしまった人間

が、全身が穴だらけで膨れ上がった、最早元がどんな姿だったのかすら予測できない肉塊に成り果ててしまう等という事態も決して少ない、極めて危険な魔物と言えるだろう。

魔物退治の専門家である冒険者たちでも迂闊には手を出せない森の狩^{ハンター}者。それがキラビーだ。

——しかしながら現在、そんな彼らが狩られる側に回っていた。

「ふっ——！」

白刃が宙を舞う。

銀の光が空中に線を描き、それによって黄と黒で配色された魔物は、鮮やかに一刀両断されていた。

本来、物静かで不気味な雰囲気醸し出しているはずの森の奥底は、現在、途轍も無い修羅場と化している。

幾百、幾千もの重厚な羽音が輪唱を奏で、辺り一面のどこを見渡してもそこに映るのはキラービーの姿だけだ。

文字通り、蜂の巣をつついた様な大騒ぎ。

そしてその中心に居るのは――ユーフォリアであった。

彼女は、いつも通りの冒険には全く向かない裸同然の格好（そもそもただの外出にもまるで向いていないが）でキラービーを狩りに来ているのであった。

もしもユーフォリアの事を何も知らない人間がこの場面を目撃していたら、目を覆う様な光景だろう。

国宝級の美少女が、数十秒後には無惨な肉塊に成り果ててしまう凄惨な未来を思い浮かべるはずだ。

「……これで100匹目」

しかしながら現実を起こっている出来事は、その予想からまるで正反対の物だった。

千に近い筈のキラービーに襲われているユーフォリアの顔に、焦り

の色は微塵も見られない。

その激しく露出した綺麗な素肌には僅かな傷すら付けられておらず、それどころか彼女が両手に手にした剣を振るうたびに、四方八方に存在していたキラビーが斬殺され、キラビーだった物に成り果てていく。

「……んっ」

それだけでも絵空事のような光景であるが、しかし真に驚嘆すべき点は他にあった。

ご存知の通り、彼女の着ている服は留め具もなく、局部の周辺に細長い布を垂れ下げただけのエロ暖簾である。

必然的に、ちよつと動いたり、少しの風で秘部が露出してしまいうようなドスケベな服装なのだが……それが見えていないのである。

服がめくれ上がりチラチラと局部が見えかけるも、毎回見えそうで見えないで終わっているのは、明らかに狙って行っている。

なんて精度の体捌き。

両手に持っているのが、シヤムシール型の曲刀であるのも相まって、まるで踊り子が妖艶なダンスを披露しているかのようだった。

つまりユーフォリアにとってキラビーとの戦闘は、誰も見ていないと言うのに露出に気をつけながら戦えるほどの驚異でしかないのである。

「これで、終わり」

そして結局、想定外の事は何も起こらず。

ユーフォリアは涼しい顔のまま、キラビーの討伐を成功させたのであった。

「じゃじゃーん！エログッズ第二だあーん！」

「あ……、う……」

ユーフォリアの顔色が赤くなったり青くなったりを繰り返す。

そこに先程、キラビーを狩っていた時の余裕はまるで見られなかった。

やはり、と言うべきか。彼女がキラビーを狩っていたのは、自分に使用されるエッチな道具の素材集めであったのだ。

「あ、あの……。本当にやるの……？」

ユーフォリアは達夫が手に持っている物を見ながらおずおずと言葉を発する。

その先にあったのは毒々しい色の薬液がなみなみと入った注射器。明らかに人体に悪影響がありそうな代物であった。

「ええっ!? キラービーの針と毒液を改造して作ったこの豊胸薬、デカパインOPに何か不安が？」

「不安しかないよ……」

今回、作成されたエログッズに対して、ユーフォリアは達夫から事前にどんなものか説明を受けていた。

曰く、豊胸薬。要はおっぱいを大きくするオクスリである。

自分の胸が小ぶりのままだった事を、達夫が何度も嘆いていたのは知っているユーフォリアだが、だからといってこんなものまで作って来るなんて……、と言うのが正直な感想だった。

「何がそんなに嫌なのさあ？」

「な、何がって……！そんな……。体を弄るなんて……」

肉体を別のモノに替えられて、性別すら変わってしまったユーフォリアにとって、胸の大きさが男性の時と然程変わらない小ぶりの物で合った事は、最後の救いだった。

それにそもそも自分の体に手を加えるという事に対する忌避感もあり、ユーフォリアとしては今回の達夫の作成したエログッズには余り賛成できない。

しかしながら、そんな気乗りしていない感に溢れているユーフォリアに対し、達夫はニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべるだけだった。「またまたそんな事言っちゃって。ゆるたんだってこれまでの実験にはノリノリだったじゃーん」

「えつと……。その……。それは……。あう……」

達夫の指摘にユーフォリアの頬が真っ赤に染まり、否定の勢いが止まる。

この前初めてユーフォリアに性処理をさせて以降、達夫は箍が外れた様に毎日、毎日、同様の行為を彼女に強要していた。

しかし、意外にもそれに関しては、ユーフォリアの方もかなり乗り気だったのだ。

まあ何せ、彼女からしてみれば、大大好きな相手から熱烈に自分を求められてからの逢瀬である。

そりゃあ喜びにも溢れようと言う物だ。

ただ、元男のユーフォリアとしては、そんな風に喜んでしまっている姿を見せてしまう事に葛藤があり、彼女はそれを誤魔化す為に、達夫の実験に快く協力をしている体で物事を進めていたのである。

だから、それを指摘されると本当に弱い。

……まあ、最も。そんな葛藤の全てが達夫には見抜かれて弄ばれて

いる上に、そもそもその葛藤事態が卑劣な手段で植え付けられた偽物の恋心を端に発している物で、もし仮に正気に戻ろうものならシヨツク死すらしかねない程の物だと言うのが救われない話である。

「そ・れ・にい。スライムちゃんE×の売れ行きは思った通り好調でしょ？ 今度も絶対にそうなるから！ なんせ、胸を大きく出来るなんてかなり需要があるんだからさ!!」

「それは……。確かにそうかも知れないけど……」

オマケに明らかに建前でしか無かった達夫の、エログッズを販売して金を稼ぐと言う事業が、割りと軌道に乗っているのもユーフォリアにとって向かい風だった。

確かに豊胸薬なんて出来上がればかなり売れそうな事は間違いないだろう。

「まあ、今回はあくまでお試しで効果も薄いから。だから大丈夫だって！」

「う、うん……。分かった」

ここまで押されてしまえば、もうどうしようもない。

ユーフォリアは結局、首をこくん、と小さく縦に振った。

「ね、ねえ……。ほ、本当に大丈夫だよね……。？」

「もー、だから心配しすぎだって、ゆうたん。そもそも俺のスキルのレベル程度じゃ、効果を強くしたくったて出来ないんだよお。さ、さっ！そんな事言っていないでお注射しましょうね」

上半身裸で胸をさらけ出しながらベッドに座っているユーフォリアは、やはり不安そうな声を上げた。

まあ、これから胸に効果の程が不透明な怪しい薬を注射されるともなれば、仕方がない話だろう。

けれども、達夫はユーフォリアのそんな不安を全く鑑みない。

彼の頭にあるのは、目の前の少女を自分好みの“ユーフォリア”へと改造していく事だけである。

「うう……」

「それじゃあ、サクツとな！」

「――っ」

そして余りにもアツサリと、ユーフォリアの胸に達夫からの注射がなされた。

鈍く光る注射器の針が、綺麗な桜色の乳首の両方に立て続けに突き刺さり、濁った色の薬液が注入される。

「ね？大したこと無かったでしょ？」

「う、うん……」

見ている側としては痛々しい光景だったが、ユーフォリアに痛みは殆ど無かったらしい。

何しろ彼女の体は SSR スキルの特別性。この程度で耐え難い痛みを覚える程やわくはないのだ。

薬の効果も達夫の事前説明によれば、上手く行って数センチ程度胸が大きくなるかどうか、と言った程度の物。

ユーフォリアの事前に感じていた不安に反して、意外にも大した事も無く今回の実験は終わりを迎える……かに思われたのだが。

「あうっ——！はあっ……！はあっ……！」

「あれ？ゆうたん？」

投薬から数分後。

ユーフォリアの様子が明らかに可笑しくなっていた。

呼吸は荒く、顔は熱っぽい。

「っ……！むねっ……。ボクのむね、なんかおかしいっ……」

「うおっ!？」

そして遂に決定的な異変が始まった。

ユーフォリアのおっぱいが、急激にその大きさを増し始めたのだ。

それも、達夫が当初説明していた数センチ程度の変化ではない。

まるで、風船を膨らませるが如く、数十センチ単位での変化が生じていく。

△カップだったバストが、B、C、D、E、そしてその上のサイズに

なるまでには、一分すらかからなかった。

漸く変化が落ち着いたその時。そこには爆乳美少女が誕生していた。

「な、なんでっ……。なんでこんなっ……。!」

「おっかしーなあ……。?こんなに効果がある筈ないんだけど……?」

ユーフォリアの方が動揺するのは当然すぎるが、以外にも達夫の方にとってもこの結果は予想外だった様で、しきりに首を傾げていた。薬の効果を偽り騙していた訳ではなく、本当にそこまでの効果は存在しないはずだった様である。

「んー、確かにそこそこ上手く作れた手応えは合ったけど、俺のスキルレベル程度じゃこんな変化を起こす薬は……。いや」

「な、なにか分かったの?」

「もしかしたら、ゆうたんを相手にエログッズを試していたお陰で、スキルのレベルが俺の思っていた以上に上がっていたのかも。ほら、戦闘だって強い相手を倒した方が一杯経験値を貰えるでしょお?」

「そ、そんな……」

ゲーム的な考えをするのなら、スライムを倒すよりドラゴンを倒した方が大量の経験値を貰えて沢山レベルアップが出来るだろう。

戦闘ではない道具作成スキルでもそれと同様の事が起こったのではないか、と言うのが達夫の推測だった。

即ち、普通の女の子を相手に実験をするより、『戦乙女』と言う超強力なスキルを持っていて凄まじく強力な存在であるユーフォリアを実験台にした方が、貰える経験値が多かったのではないかと。

ヤケに説得力のあるその推測は、ユーフォリアを更に淫らな地獄に突き落とす物だった。

ただでさえ、心を卑劣に弄ばれて肉体までも淫らな実験をさせられ、よりにもよってその材料を自分自身で調達させられていると言う、どれだけ最悪と言っても言い足りない様な状況。

その上、実験体として最高の素材で、やればやるほど実験が過酷に、効果が大きくなっていくという事らしい。

一体ユーフォリアは、どれだけの責め苦を味わえば良いと言うのか。
「ふむふむ。この効果を見るに、一般人に使う際には百万倍くらいに希釈した方が良いっぽいね」

「ひゃ、百万倍って……!？」

何気なく呟かれた達夫の言葉に、ユーフォリアの顔色はサツ……と血の気を引かせた。

つまり逆に言えば、今のユーフォリアは通常の、或いは安全に使える量の薬の100万倍濃い物を注入してしまった状態という事で……。

そんなもの、どう考えても危険だと分かるし、これ以上何が起るかも予想できない。

——いや、何が起るかは直ぐに分かった。

何せ、ユーフォリアの体に更なる異常が発生したのである。

「あうっ……!?また、胸が熱くっ……!」

「更に大きくなる訳じゃ無いようだけどお？」

「っ……！な、なんか出ちゃううっ ♡♡♡♡」

ユーフォリアの口から途轍もなく切羽詰まった。それでいてどこか色っぽい叫びが飛び出した。

それと同時に、彼女の大きくなったおっぱい。その乳首から、白い液体が噴出した。

それは、最初はぴゅっ ♡♡ぴゅっ ♡♡と断続的に。

そして、少し経つとびゅるるるっ ♡♡♡♡♡と噴水の様に溢れ出した。

部屋の中が甘く蕩けるような匂いで満たされる。

そう。それは正しく――



「母乳キター！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

達夫がとても下品に歡喜の声を上げた。

そう。ユーフォリアの胸からは、妊娠もしていないと言うのに、ミルクが溢れ出したのである。

それも、普通の母乳ではなく、異常に香しいミルクである。

この衝撃的で最悪な状況に、しかしユーフォリアは意外にも大した反応をしていなかった。

いや、反応する余裕すら無かった、
 と言うべきか。

「おっつ♡♡♡なにごれっ♡♡♡はひっ♡」

（あたま♡♡♡ちかちかして♡♡♡なにも♡♡♡分かんない♡♡♡）

その時、ユーフォリアが味わっていた感覚は筆舌に尽くし難い。

それでも敢えて表現するのなら、乳腺の中に今にも絶頂寸前の超絶敏感極小クリトリスが数百万個出来上がり、母乳が噴出する度、

それら全てが一斉に刺激されるような感覚……だろうか。

取り敢えず、人が味わってはイケナイ快感である事だけは確かだった。

「むむむ。毒に対する体の防衛反応だねえ。暫くすれば多少は落ち着くと思うよお。……ま、完全には治らないだろうけど」

「イグッ♡♡♡♡♡あひっ♡♡♡♡♡たっお♡♡♡♡♡たしゅけへえっ♡♡♡♡♡」

胸から母乳を、オマンコから愛液を噴出させながら、必死に助けを求めるユーフォリアを厭らしい表情で観察しながら、達夫はただ股間を膨らませているだけだった。

結局、ユーフォリアがある程度の落ち着きを取り戻すまで、小一時間以上を有した。

「こ、こんなっ。こんにゃっ♥♥♥ううっ……！」

母乳噴出連続絶頂イキ地獄が多少は落ち着き、一応は現状の認識と、会話を行える程度の体力は取り戻したユーフォリア。

しかしながら、その有様は酷い物だった。

大きくなった胸のサイズは一ミリたりとも戻っておらず、母乳の噴出とそれに伴う異様な快楽についても、それこそ本当にとりあえず、底が抜けた様にどぶどぶ♥♥♥と母乳が出続ける、人としての生活を送れない状況をなんとか脱しただけだ。

未だに胸は痛い程に張っていて、時折ぴゅっ♥♥♥ぴゅっ♥♥♥とミルクが飛び出して、甘いニオイと甘い声が部屋の中に広がっていて、少なくとも直ぐに治りそうな気配は微塵も感じられなかった。

ユーフォリアの肉体で唯一、男だった時の面影を残していた筈の慎ましやかな胸は、もはや【少女】や【女】を通り越して【ドスケベ雌牛】の部分となってしまったのだ。

「ひぐっ……。あひっ♥♥♥うぐう……。とにかく、直ぐに治療、す

るから……」

「……………!？」

泣き声と喘ぎ声がブレンドされた、世にも奇妙な声を出しながら、ユーフォリアはそんな風に呟いた。

そう。この最悪な状況下において唯一の救いは、ユーフォリアに与えられたチートスキル【戦乙女】の回復魔法なら、この最悪の状況を打開出来る可能性がある！と言うことだろう。

そもそも、薬の程度がこの程度で済んでいるのだって、チートスキルのお陰である。

状態異常耐性を意図的に落としていたとはいえ、常人とは一線を画す身体スペックが毒の効果のある程度打ち消したのである。

そうでなければ、安全に使用できる濃度の100万倍の毒など、乳房が爆発して死んでしまっても可笑しくは無かっただろう。

そして、それを考えれば治療にも希望の光は見えて来る。

完治は難しいかもしれないが、ある程度マシになる事は確実と言っ

て良い。

しかし、その為に必要となるのは迅速な治療である。

古今東西、あらゆる怪我や病気の治療に最も大切な事は、早期発見・早期治療だ。

人の命を脅かす重篤な病の兆候を早めに発見できたが故に簡単に完治させられたり、逆にまるで大したことの無い怪我を、これなら大丈夫だろう、と放っておいた結果、取り返しが付かなくなる、なんて事例は枚挙に暇がない。

今、ユーフォリアの身を脅かしているのは、豊胸薬（毒）等と言う
異世界特有のドスケベ薬だが、しかしその治療の前提は変わる事は無
い。

だから、直ぐにでも回復魔法を……と、ユーフォリアが大きくなり過ぎた自身の胸に手をかざした、その時――。

「それを治すなんてとんでもない！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「駄目だよ、ゆーたん。最高に似合っているのに、元に戻そうとするなんて!!!!」

「そんなことっ♡♡♡いわれたってえ……♡♡♡♡♡」

意識を朦朧とさせながらも必死に問いかけたユーフォリアに対し、達夫の発した答えは余りに身勝手なものだった。

しかしユーフォリアとしては、いくら達夫の言葉であっても、それは受け入れ難かった。

こんな母乳を垂れ流し、その度にメスイキを晒してしまう爆乳なんて、元男として以前に、人としての尊厳すら危ぶまれるからだった。だから、ユーフォリアは達夫の言葉には応じず、なんとか胸を治そうと思ったのだが……。

「今のゆーたん、史上最高に可愛いから！見てるだけで、チンポがビンビンだよ!!だから絶対治しちゃ駄目だよお!!そんな事をしようとするゆーたんにはこうだ!!ふひっ!」

「ほによっ♡♡♡いっ♡♡♡ちくびいっ♡♡♡こりこり

っ♡♡♡♡しないれっ♡♡♡♡やぁあっ♡♡♡♡褒めないれえっ♡♡♡♡」

気色悪い褒め言葉を口にしながら、達夫はユーフォリアの胸を弄ぶ。
ぴんっ♡と勃起した桜色の乳首がこりこりっ♡♡と扱かれぴゅう
くく♡♡♡♡と母乳の噴水を作る度、ユーフォリアの口から堪えき
れない快樂の音が漏れ出した。

「ほら！ほら、ほら、ほらっ!!治さないって約束するまで止めてあげ
ないからねえっ!」

「はひっ♡♡ほっ♡♡やっ♡♡だめえっ♡♡いきゅっ♡♡あっ♡♡
♡♡」

「おっぱいミルク出しまくってるゆーたん、最高に可愛いから！マジ、
愛してるって感じ、ひひっ!」

「あ♡♡だめっ♡♡それっ♡♡そんなんっ♡♡いわないれっ♡♡♡♡
ひあっ♡♡」

(頭、くらくらしてえっ♡♡♡♡なんにも考えられなくなっちゃうっ♡

♡♡♡)

ぴゅっ♡♡♡ぴゅっ♡♡と何度も母乳が搾られる。

こんな胸は絶対に嫌で、早く治さなきゃ！と言う思いが、果て無い
快楽の津波で押し流される。

しかしながら、ユーフォリアにとってそれ以上に効果的だったのは、
達夫からの欲望に満ちた言葉だった。

誰が聞いても吐き気がするほどに気持ち悪い達夫の言葉だが、ユー
フォリアにとってだけは最愛の人からの言葉だ。

正直な所、愛する相手からこれほど求められるのはユーフォリアと
しても悪い気はしておらず、なんならそれ自体は飛び上がりそうな程
に嬉しいくらいだった。

「今のゆうたんの姿、俺の理想の嫁だからっ！ずっとそのままできて
よお!!!!」

「はひっ♡♡♡♡ひゃんっ♡♡♡♡」

(お、お嫁さんっっ♡♡達夫のお嫁さんっっ♡♡♡♡♡)

快感で朦朧とする頭に、世界で一番愛している人間からの、自分を求める言葉。

ユーフォリアの意識が、まるで極楽にいるかのような気分で包まれて――だから彼女は取り返しが付かなくなると分かりながらも、こくんっ。と頷いてしまった。

「ひひひひひっっ！ありがとう、ゆうたん!!愛してるよおっ！」

「はひひひひっっっっっ♡♡♡♡♡と再び大量の母乳が溢れ出して、ユーフ

それにすっかり気分を良くした達夫が、景気づけに「発!」とばかりに、ユーフォリアの胸を再び力強く揉みしだいた。

びゆるるるるっ♡♡♡♡♡と再び大量の母乳が溢れ出して、ユーフ

オリアは幸せな気分のまま意識を失った。

胸を治せる千載一遇の好機が、手の平からするすると抜け落ちていつてしまった瞬間である。

――結局、次の日にユーフォリアが目を覚ました時。

彼女の胸は、もう治すのには手遅れな状態になってしまっていた。

ユーフオリアはこれから一生、ドスケベ牝牛爆乳と付き合って生きていかねばならなかったのである。

LEVEL5 ハウンドドッグの唾液と体液好物化

ハウンドドッグ。

荒野地帯に生息する大型の魔物である。

体長は1mを超え、ブルドッグを百倍蔽つくした様なその姿は、飼
い犬に感じるような愛らしさをまるで感じさせない。

この魔物の特徴的な点を一つ上げるとするのなら、それは一度狙い
を定めた獲物に対する執着性だろう。

獲物を認識した途端、優れた嗅覚で、縄張りの外に逃げられても執
拗に追いかけて・追い詰めまわし、仕留めた後は爪の先から骨の髄まで
をしゃぶり尽くす。

その姿は正しく荒野のハンター。それがハウンドドッグと言う魔物
であり、今回、ユーフォリアが狩ろうとしているターゲットであった。

「――ふう」

燦々とした太陽の光が照り付ける荒野をユーフォリアが歩いてい

る。

恰好は何時も通り、一度でも目視した男の目を二度と離さない、踊り子風のドスケベ衣装。

胸がメロン染みた爆乳となって所為で、その破壊力は更に増していた。

「ん。こちら辺で良いかな」

胸をぷるん！と震わせて、ユーフォリアが異次元アイテムボックスから取り出したのは、麻布で出来た小さな巾着袋の様な物であった。彼女はその口を広げ、そして地面に置いた。

一体何をしているのか？その答えは、数分後に簡単に分かる事になる。

「――来た」

「Garrrrrr――！」

ユーフォリアが何かの到来を察知してから数瞬。荒野の端から、獣の唸り声と足音が鳴り響いた。

その音の正体は、何匹かのハウンドドッグ。

偶々、遭遇した等と言う訳では無く、ユーフォリアを狙ってやって来たのは明らかだった。

それも、その筈。それこそが、ユーフォリアが取りだした袋の効果。におい袋と呼ばれているこの袋は、常人の鼻では大して感じられないが、ハウンドドッグの優れた嗅覚ならば感じ取れる彼らが好むニオイが入れられており、使用することでおびき寄せる事が可能なのだ。大好物のニオイに釣られ、涎をまき散らし狂喜乱舞しながら荒野を駆けて来るその様は確かに恐ろしい。

しかしながら、ユーフォリアであれば問題は無い……筈なのだが。
「――っ！」

ユーフォリアの顔に、今まで魔物と戦った時には一度も見せてこなかった緊張が微かに浮かぶ。

確かに危険な魔物である事は確かだが、キラービー等と比べて圧倒的に危ないという訳でも無い筈のハウンドドッグに何か秘密がある

のだろうか。

ともかく、何故か躊躇いを見せるユーフォリアに、都合㊦匹のハウンドドッグたちはあっという間に距離を詰め、その犬歯を剥き出しにして四方八方から飛び掛かった。

「Gauuuuuuu!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「はあっ……!」

「Kyan?」

それは一瞬の事だった。

飛び掛かるハウンドドッグたちに対し、徒手空拳で無防備な姿をさらしていた筈のユーフォリア。

しかし、瞬き一回程の時間の後、ユーフォリアの両手には鈍く光る曲刀があり、勢いよく飛びかかってきていた筈のハウンドドッグ㊦匹が、ぽとん……。と力なく地面に落下して動かなくなったのだ。

何が起こったのかと説明すれば単純で、ユーフォリアがアイテムボックスから剣を取り出し、目にも留まらぬ速さでハウンドドッグ達を

切り捨てた、と言う訳だ。

まさに楽勝。危なげな瞬間なんて欠片も無かった。

しかし、ならばユーフォリアが見せた躊躇いは一体何だったのだろうか？

「……………ゴメンね」

猛然と襲いかかってきたハウンドドッグの死体を前に、ユーフォリアはどこか悲しげな雰囲気醸し出しながら、そんな風に呟いた。

——そう。彼女は犬が好きだったのである。

もしこれでハウンドドッグの見た目がチワワみたいだったなら、自分には戦うことが出来なかったかも知れない。そんな風に思うユーフォリアであった。

「じゃんじゃじゃ〜ん！新作が完成したよ、ゆ〜たん！」

「おめでとう、達夫」

場所は変わって何時もの宿屋。

ユーフォリアの心と身体と尊厳を弄ぶ、性処理&エロ実験の時間である。

遠慮の心など欠片も見えず、毎日、毎日、欠かさず繰り広げられており、最早ユーフォリアがやらなければならない義務の様な扱いにすらなっていた。

例えば今など、達夫の命令で彼に、一糸まとわぬ姿を晒しているユーフォリアだった。

「ハウンドドッグの肉や骨、そして唾液を練り込んで作ったのがこれ！ひひっ、自信作だよお……！」

怪しげな説明をした達夫の手には、説明通りの怪しげな丸薬が握られていた。

普通の人間だったら、何が合っても絶対に飲みたく無いだろうし、万が一口の中に入り込んだ日には、胃の内容物全てリバーズすること

になつてでも、吐き出すことだろう。

「さ、ゆーたん。これ、飲んでよ」

「うん。わかったよ。はい、ん……。これで、大丈夫？」

だというのに何ということだろう！

ユーフォリアと来たら、余りにもアツサリと、その怪しげな丸薬を飲み込んでしまったのだ。

翌々、観察してみるとユーフォリアの様子がどこか可笑しい。

例えば、キラービーの毒針を使った注射の時には見られた、怖がったり、躊躇ったりしている様子が一切見えてこないのである。

何なら、隠そうとはしているものの、どこか喜々とした感情すら見えてくるようで、つまりユーフォリアは今回の実験には乗り気であるらしかった。

「ぐふふつ。事前の説明通り、ゆーたんにはこれから俺とあることをしてもらふ訳だけど――」

「……………！」

「ま、普通にやっちゃつまらないよね。それじゃあ——！」

「きゃっ!? た、達夫……?」

不穏な言葉を呟いた達夫が、ユーフォリアの背後から彼女に抱きついた。

そしてとっくに露出している自分のチンポを、ユーフォリアの下半身——オマンコの割れ目に沿わせ、そして擦り付け始めた。



「素・股。実は体験して見たかったんだあゝ。だからヤラせてよ、ゆゝたん」

「う、うん。あの……。実験はしながら、だよね……。？」

「勿論、そうだよおゝ」

「そっか。……。そっか♥♥。うん。ボク、頑張るね。あんっ♥♥胸を揉んじゃ集中出来ないよお♥♥♥♥」

自身の恥部の割れ目に、明らかに欲望で滾りに滾ったデカチンを擦りつけられるという、元男として最大の危機。

だと言うのに、ユーフォリアにその事に対しての緊張感はまるで見られない。

いや、と言うよりは、他の事が気にならない程に、何か別のモノに気を取られている、と言うべきか。

どうやら今のユーフォリアにとっては、オマンコにチンポを擦り付けられている事よりも、胸を揉まれて母乳を搾られて喘ぎ声を上げさせられている事よりも、今回の実験の内容の方が遥かに重要な事であ

る様だった。

「うほ、ゆーたんのオマンコ気持ちええ。ひひっ、それじゃあ、このまま実験をしようか。事前に言っておいた通り、今回飲んで貰った丸薬の効果を発揮する為には、俺の体液をゆーたんに飲んで貰う必要があるんだ。だから――」

「キス、だよね♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

待ちきれない、とばかりに達夫の言葉を遮ったユーフォリアは、背後から抱き着かれて素股をされているまま、自身の顔を達夫の顔に近づける様に回した。

そして、その勢いのまま、その可愛い唇を達夫の唇と合わせ――キスをした。

ちゅっ♡♡♡と言う可愛い水音が微かに響く。

「きひっ……！ゆーたんったら、大胆だなあ……！」

「じ、実験♡♡♡キチンと実験に協力しないと、だからっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「ふーん？ま、それじゃあ、ちゃんと協力して貰わないとね、もつと

キスしないと効果が出ないから」

「うん。分かった♥♥んちゅううう♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

一度、キスを交わした途端、箍が外れた様にユーフォリアは何度も達夫とキスを繰り返すようになった。

それもどんどん深く、どんどん濃厚な物に変わっていく。

最初は、恐る恐る試す様なキスだったと言うのに、今やベロとベロを絡ませ合い、互いの唾液を交換するような熱烈な物になっていた。

「くほっ……！あゝ。ゆるたんの口、美味えゝゝゝ」

「んちゅう♥♥♥♥ひんっ♥♥♥♥はひっ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥たちゅおゝゝ

♥♥♥♥♥♥」

（ああ、ボク……。達夫とキスしてる♥♥♥♥♥♥でも、実験♥♥♥♥実験だからっ♥♥♥♥♥♥）

実験の為、とユーフォリアは繰り返しているが、その顔にありありと浮かぶ幸福そうな表情を見れば、彼女が非常に乗り気である事は一目瞭然だった。

傍から見れば、美（少）女と野獣（の方が百倍マシなキモオタ）のキス映像。

しかし事、ユーフォリア本人にとっては、最愛の王子様との睦み合いなのだ。

そもそもユーフォリアの心と頭は、卑劣に植え付けられた恋心の津波で滅茶苦茶な状態である。

けれども、不幸中の幸い——或いは不幸中の更なる不幸で、弄ばれているのは恋心だけ。

ユーフォリアと言うより、本原 有としての善心や、常識は弄られておらず、可笑しい事は可笑しいと分かる訳だ。

だからこそ狂おしい程愛している相手から誘われても、元男として男である達夫とエエな事なんて……！と躊躇と葛藤をもち続けたのである。

しかしながら、人間とは良くも悪くも物事に慣れるものだ。

犯罪やマナーの悪い行為などによく見られるが、最初は緊張と罪悪

感でおずおずと行っていたにも関わらず、繰り返す内に何とも思わなくなり、平然と行う様になる、なんて事は珍しい事例ではない。

それと同様の事が、今のユーフォリアにも起こっていた。

毎夜、繰り返される、淫靡な実験。

媚薬を体に掛けられて、股座を濡らしながら相手のオナニーを手伝う。

雌牛の如く搾乳をされて、喘ぎながらミルクを搾られる。

そんな倒錯的で、変態的な行為を何度も、何度も繰り返す内に、ユーフォリアが淫らな地獄に堕ちるのを辛うじて防いでいた『常識』と言う命綱は、少しずつ千切れかけて来ているのだ。

あれ程の変態的な行為をしてしまったのだから、今更この程度の事で悩んでいても仕方が無いだろう、と言うある種、人として当たり前の思考が、ユーフォリアにとっては最悪の毒であった。

最早、今のユーフォリアは達夫とのキスくらいならば、然して葛藤を覚えなくなっていたし、葛藤を覚えない以上、心の中を埋め尽くし

ている猛悪な恋心が牙をむくのは当然の事だった。

「……たつおっ♥♥たちゅおっ♥♥♥♥♥♥あむっ♥♥♥♥♥♥ひゃう
っ♥♥♥♥♥♥んんっ♥♥♥♥♥♥あひっ♥♥♥♥♥♥きもひ良いよおっ
……♥♥♥♥♥♥」

「きひひひっ。ゆーたんったら大胆だなあ……!」

幸せ。幸せ。幸せ。幸せ。幸せ。幸せ。幸せ。幸せ。幸
せ。幸せ。幸せ。幸せ。幸せ。幸せ。幸せ。幸せ。幸
せ。幸せ。幸せ。幸せ。幸せ。幸せ。幸せ。幸せ。幸
せ。

舌と舌が絡み合う。大好きな人との濃厚なキス。

とてもとても幸福で、元男としてどうだ、こうだ、なんて悩みが途
轍もなくちっぽけに感じる。

互いの唾液が混じりあった糸が、自分と達夫の唇を繋いでいるのを
見て、ユーフォリアは何とも言い難い快感を覚えた。

「ほらほら、オマンコもおっぱいも一杯弄ってあげるからね。ど

う？気持ちいいでしょ？」

「あひっ……♡♡♡やんっ……♡♡♡それっ♡♡♡ダメっ♡♡♡駄目なのにつ♡♡♡♡♡」

（ダメな筈なのに……♡♡♡♡♡頭がぼーっとして何も分かんないっ……♡♡♡♡♡♡♡♡♡）

「そんな事言っ、ゆーたんすっごい笑顔じゃん！ひひっ、本当は嬉しいんだろう？ほらっ！ほらっ！おらっ……！」

「ひんっ♡♡♡ひゃんっ♡♡♡おっぱい♡♡♡びゅっ……♡♡♡はひっ♡♡♡う、うん……♡♡♡」

達夫と何度もキスをする——幸せ♡♡♡♡♡

乳腺からびゅるるるるっ♡♡♡とおっぱいミルクが溢れ出す——気持ちいい。

オマンコをチンポでコスコスっ……♡♡♡と刺激される——気持ちいい。

ユーフォリアは、ついにそれを認めてしまい、こくんっ、と可愛らしく首を縦に振ってしまった。

当初、実験を始める前。ユーフォリアは、キスこそは楽しみにしていたが、だからといって他のエロな事に乗り気になっている様子を見せたら駄目だよね……。なんて考えを持っていた。

しかし、実際はこれ。今や、彼女はただ愛する人との触れ合いにドハマりしている一匹のメス牛だった。

要は、麻薬やドラッグに中高生がハマられる時にありがちな流れである。

最初は、副作用も小さく比較的安全なものだから！と言って試させられ、後からドンドン取り返しの付かない物を使わせられていく。そう言ったものは、最初に強い意志を持って拒絶する事こそが何よりも重要で、ちよつと試すだけなら……。なんて事をすれば、底なし沼にズブズブと引きずり込まれていくだけなのだ。

そして、今回のユーフォリアにとっては、それがキスだった。

今更キス程度なら、悩まなくても良い？残念ながらそうは行かない。
ユーフォリアの中に渦巻く恋心と、それによって齎される幸福感は
それこそ麻薬など及びもつかないほどに大きな物である。

一瞬でも受け入れてしまえば抗うことは不可能で、ユーフォリアが
これまで必死に守っていた籐は、完全に外れてしまっていた。

「達夫っ……♡♡♡たちゅおっ♡♡♡キスっ♡♡♡もつとキスして
っ♡♡♡♡♡」

「ぐふふふっ……！ゆーたんは甘えん坊さんだなあ。んーむっ！ほ
らっ、これがいんだろお？」

「うんっ……♡♡♡♡♡これ好きっ♡♡♡達夫っ、大好きっ
♡♡♡♡♡」

（ああっ……♡♡♡言っちゃった……♡♡♡♡♡言っちゃだめだ
ったのにっ……♡♡♡♡♡♡♡♡♡）

そして遂に言^告っ^白てはなら^のない言^葉を口にしてしまった。

それだけは胸に秘めて置かなければ、とずっと心に決めていたのに、

つい弾みで口から出てしまったのだ。

ユーフォリアから告白を受けた達夫の顔が、厭らしく、そして醜く歪む。

中々、最後の一線を超えてこなかった獲物が、ノコノコ罠にかかったのだ、笑うしかない。

「ひひひっ……！俺も好きだよ、ゆーたん」

「……………！ほ、ホントっ!?♥♥♥本当にホントっ??♥♥♥」

「駄目な事だとずっと悩んでただけどね……。ゆーたんの事が子供の頃から一人の人間として好きだったんだよお」

「ぼ、ボクもっ……！♥♥♥ボクもそうなんだっ♥♥♥ずっと達夫の事が好きでっっ♥♥♥♥♥嬉しいっ……！♥♥♥達夫も同じ気持ちだったんだ……♥♥♥♥♥」

「ぐふっ……！まさか、両思いだったなんてねえ。それじゃあ、誓いと祝いのキスでもしようよお」

「達夫、だいすきっ……♡♡♡ちゅうううっ♡♡♡♡♡」

(ああっ……。嬉しいっ♡♡♡こんな夢みたいなさがあるんだっ♡♡♡♡♡)

心の中心から、際限なく湧き上がってくる幸福感。

ユーフォリアを地獄の底に堕ちる一步手前でなんとか支えていた、
自分の^{達夫が好}気持ちを伝えれば、引かれてしまうかもしれない……。と言う
命綱が千切れてしまった。

もう堕ちるのを止められない。

「それじゃあ、ゆーたんの体。もっと堪能させてよお……!」

「うん。うんっ……。♡♡♡あ、おっぱいっ♡♡♡みるくっ♡♡♡
ひんっ♡♡♡いくっ……。♡♡♡えいっ……。♡♡♡すりすりっ♡♡♡ぴ
りぴりすりゅっ♡♡♡達夫、気持ちいい……。?♡♡♡れろっ♡♡♡
ちゅうっ♡♡♡♡♡」

母乳を搾られメス顔を晒し。チンポをオマンコの割れ目で甲斐甲斐

しく刺激し、何度も何度も深いキスを繰り返す。

最早、元男として取り返し of 行為を、ユーフォリアは喜々として幾度となく行った。

——だって想いが通じ合ったのだから。もう我慢する必要が無いのだから。

「ふう……。えがった、えがった……。それで、ゆうたん？実験の成果はどうだったあ？

「はあっ……。♡♡♡はあっ♡♡♡え？♡♡♡実験……。？♡♡♡♡」

「そうそう。そもそも、今回は薬の効果を試すのが目的だったでしょう？」

「あっ……。♡♡♡♡♡ご、ごめんっ♡♡♡ボク、すっかり忘れててっ

……。！♡♡♡」

度重なる快樂に、肩で息をしながらベッドに倒れ伏しているユーフォリアに対して、達夫が声を掛けた。

それによって、色々あつてすっかり忘却の彼方にあつたが、そもそも今回の目的はハウンドドッグの素材を使って作った丸薬を試す事だつたと思ひだし、ユーフォリアの顔が微かに青くなる。

その効果を検証するにはキスの時にある事を気にしてなければならなかつたのだが、完全に忘れてしまつていたし、そもそも愛する男とのキスは余りに幸福すぎて実験の効果を確かめるのには、まるで不向きだつた。

「いやいや、俺も夢中になつてたし仕方がないよお。その代わりに、これからタップリやつてくれれば、構わないからサ」

「えつと……♡♡♡」

仰向けで倒れるユーフォリアの横顔に、幾度も射精したというのに未だに硬さを保ったままの達夫のチンポがぴたん♡♡と不躰にくっつけられる。

頬に感じる雄の熱気に、顔を紅くし、股を湿らせながら、ユーフォリアは自分に何が求められているのかを探った。

「パイズリしながらフェラしてよ、ゆうたん。パ・イ・ズ・リ・フェラ！今のゆうたんみたいな下品なデカパイで搾り取って貰うのが昔からの夢だったんだあ〜」

そんな彼女に、達夫が要求したのはやはりデリカシーの欠片もない、己の欲望を満たすためだけの行為だった。

ふざけるな、と普通ならば思うだろうが、今のユーフォリアは普通ではない。

「うん、わかったっ……！♥♥♥達夫が望んでくれるならっ♥♥♥♥♥」
最早、一片の躊躇すら見せずにユーフォリアは頷いた。

イキ過ぎで痺れる全身を無理矢理に動かし、爆乳をぶるんっ♥♥♥と揺らしながら、彼女は自分の胸の谷間に精液で汚れた達夫のチンポを挟み込んだ。

「おほっ……、これは……！」

「どう、かな？気持ち良い……？」

「最高だよ、ゆーたん！揉んでる時も思ってたんだけど、ゆーたんのデカパイって、凄く柔らかいの、とても弾力があって、まるでパイズリするためにあるような最高のおっぱいだよお！ひひっ!!」

「そう……？喜んでくれるなら、嬉しいな♥♥」

ユーフォリアの爆乳は、達夫が作ったエロ豊胸薬の効果で膨らんだ物である。

彼が自身のスキルを用いて作るのはエログッズであり、女を都合の良いメスに堕とすための物である。そして当然、薬もその例に漏れることは無い。

よってユーフォリアの胸も、ただ大きく膨らんだだけではなく、極めて淫靡に成長してしまっていた。

その感触は柔らかく、しかし非常に弾力があり、揉んだり挟んだりするのに適している。

感度は非常に高く揉めば揉むほど喘ぎ声が飛び出し、極めつけにそ

の乳腺からは、濃厚で甘く美味しいミルクが絶えず搾り取れる。

正しく、男の欲望を満たすためだけに存在しているかのようなデカパイ。

人としての尊厳をこれでもか、と弄ぶような最悪の実験結果だった。
——けれども、ユーフォリアは幸せそうに笑っていた。

思う所が無いわけではない。しかし、それ以上に達夫が喜んでくれるのが、嬉しかったのだ。

「それじゃあ、ゆーたん。胸で擦りながら、フェラしてよ。はやくうゝゝゝ」

「すぐ、やるね。……あむっ♡♡♡」

爆乳の谷間から顔を出した達夫の勃起チンポを、ユーフォリアは躊躇いなく己の口に含んだ。

元男でありながら、男のチンポを舐めさせられる。極めて屈辱であり、ユーフォリアもこれまでであれば、それは流石に……、と少し拒否反応を示しただろう。

しかしもはや別。達夫と心を通じ合ったと言う可哀想な思い込みに
より、今のユーフォリアを『縛る枷守ってくれていた命綱』は完全に
外れてしまっている。

もはや彼女にとって、相手が達夫であるのならチンポを舐める程度、
全く躊躇う必要性を感じなかった。

だって自分たちは愛し合っているのだから。

「じゅぷっ……♡♡♡ひゃぷっ……♡♡♡ろう……？♡♡♡きもひい
い……？♡♡♡」

「くほっ……！これはああっっ……！」

「じゅぷぷっ♡♡♡♡♡じゅぞぞぞぞっ♡♡♡♡♡ちゅうう
ううううっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「どんどん上手くなりすぎっ……！天性のドスケベかよっ……！」

ぴゅっ♡♡♡ぴゅうう♡♡♡と母乳を噴き出しながら、ぎゅむっ♡
ぎゅむっ♡♡♡とチンポを擦り上げる。

精液と我慢汁で汚れに汚れたチンポを口の中に含み、ベロと口内で

丹念に刺激する。

ユーフォリアのパイズリとフェラは、一秒毎にその上手さを上げて行く。

前にも言ったが、『戦乙女』のスキル効果によるものである。英雄になれる力を男のチンポを悦ばせるためだけに無駄に使っているのだ。

自分の身体の動きを完全に制御し、達夫の反応を深く観察する。

そして、彼が悦ぶ動きを学習して繰り返すのだ。

ましてや今のユーフォリアには、恥ずかしさの枷が無い。ものの数分で彼女の性技は未通女のそれから、熟練の娼婦を超えるレベルにまで跳ね上がっていた。

ユーフォリアはまるで△△女優の様に、達夫のチンポを喉奥にまで差し込むと、勢いよくバキュームを始めだす。



「無理っ、もう我慢できない……!」

「らひてっっ♡♡ボクの口のなひゃっ♡♡♡達夫のせーしっ♡♡♡じゅるるるるるっっっ♡♡♡♡♡」

「全部、飲み込めっ……!射^でるっ——!!」

「んぶっ!?♡♡♡ごぼっ……♡♡♡ごきゅっ♡♡♡」

射精感が最大に高まった達夫が、ユーフォリアの後頭部を両手でガツシリと掴みつつ射精をした。

びゅるるるるるっ♡♡♡と大量の精子がユーフォリアの口内にぶちまけられる。

「ふう……。でたでたあゝ。あ、ゆうたん。出した証拠を見たいから、ほらべロ出して、あゝん」

「ふぁいっ……♡♡♡あーん♡♡♡♡♡」

達夫の促されるまま、ユーフォリアが口を開き、べロをいー♡♡と突き出した。

可愛らしい舌の上にプリプリの濃厚ザーメンが乗っている様子が、

ただひたすらに厭らしかった。

「ぐふっ……！いいよ、良いよお。それじゃあゆるーたん。
良・く・味・わ・つ・て・ね」

「うんっ♡♡♡」

そしてそんなユーフォリアに、達夫がさらなる難題を投げかける。
粘ついたキモオタザーメン。勢いに任せて飲み込むのすら至難のそ
れを、彼はよりにもよって味わって飲み込め、と言い放ったのだ。

普通の女性ならば、余りの嫌悪感に失神すらしかねない提案だろう。
しかし、ユーフォリアは、ニコリ♡♡と可愛い笑みを顔に浮か
べて、達夫の要望を受け入れた。

「んっ……♡♡はむっ……♡♡くちゅっ……♡♡♡♡♡」

（んんっ……♡♡♡♡♡ねばねばして♡♡♡♡♡ぷちぷちしてっ
♡♡♡♡♡生臭いニオイは口の中に広がって……♡♡♡♡♡）

途端、ユーフォリアの味覚に加えられる不快な刺激の絨毯爆撃。
凡そ、地獄の様な感覚だろう。

仮に、餓死寸前の人間であつても耐えきれずに吐き出すに違いない。

しかし――

「ねえ、ゆうたん。味の感想は？」

「と・つ・て・も・美・味・し・か・つ・た・よ・♡♡♡♡」

ユーフォリアの口から飛び出したのは、全く意味の分らない妄言だった。

それが過剰な愛ゆえのお世辞ではなく、確かな感想である事は、キモオタザーメンを味わい始めてから、こうして飲み込むまでの間、一度たりとも彼女の表情が歪まなかった事を鑑みれば分かるだろう。

つまりユーフォリアは、本心から達夫の精子が美味しい、と言ったのだ。

まるで味覚がどうにかなくなってしまったのか、と思う程の馬鹿げた感想。

しかしそれもその筈だ。何せ味覚がどうにかなったのだから。

「クヒヒツ……！特定の体液の好物化完了！実験成功だねえ!!」

「うんっ♥♥♥おめでとう！達夫♥♥♥♥♥」

特定体液の好物化。

それがハウンドドッグの素材を用いて作られた丸薬の効果だった。詳細を説明すれば、丸薬を飲んだ者が、一定時間内に一定量以上他人の体液を接種した場合、その相手の体から発生する液体の全てに対して味覚が異常嗜好を発生させるようになるのだ。

また、味覚程ではないが、嗅覚にも似たような効果があり、相手の体臭が強制的に好みのニオイとなってしまう。

それだけでも大概だが、一番に酷いのは感覚器官を異常変容させる都合上、今まで好ましく感じていたモノに対しての感覚は大幅に減少するという事だった。

つまり、お母さんの作ってくれたカレーやオムライスが大好きだったユーフォリアの舌は、達夫の体液以外を美味しく感じられないドスケベわんちゃん舌に変えられてしまったのだ！

それはなんて酷い所業か。人を人と思わないとは正にこの事だろう。

液を飲まされる機会の方が遥かに多くなる事は、もはや自明の理だろう。

結局、ユーフォリアはこの日だけでもお腹の中がパンパンになる程に、フェラをさせられるハメになったのであった。

「すう……。あっ……。♥♥♥」

「ゆーたん、可愛いよお。ゆーたんっ」

もはや朝が近くなりだした頃。

度重なるフェラに疲れて、無防備に寝静まるユーフォリアの体を、達夫が厭らしく弄んでいた。

そこに躊躇など欠片も無く、美少女の乳首を弄って母乳を噴出させたり、オマンコを弄って喘がせたり、とやりたい放題である。

「ぐふっ……。！ぐふふっ……。！もう、そろそろゆーたんの体もイイ感じに仕上がって来たかな」

そんな健全な男子なら誰でも羨む環境にありながら、達夫の頭は更なる欲望で一杯だった。

彼からすれば、直ぐにでも襲い掛かりたかったのを我慢して、ここまで調理してきたのである。

しかしその我慢も、もう限界だった。

「さ、次の実験で完全に女の子にしてあげるからね、ゆーたん♥」
気分はさながら育てに育てた果実を収穫する果物農家。

達夫は、ユーフォリアの下腹部——丁度子宮の上あたりをトンっ♥♥トンっ♥♥と指でノックしながら、その時を愉しみに嗤った。

「んう……♥♥♥」

それに対して、寝ているユーフォリアに出来たのは、ただ気持ち良さそうな声を漏らす事だけだった。